

富山2遺跡

発掘調査報告書

1996

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

と
富山^{やま}
2 遺跡

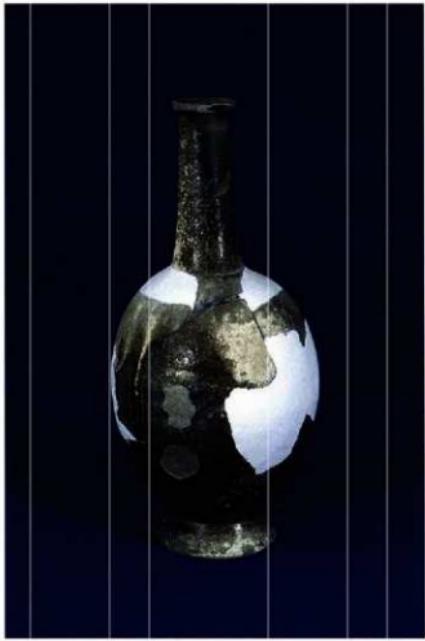
発掘調査報告書

平成 8 年 9 月

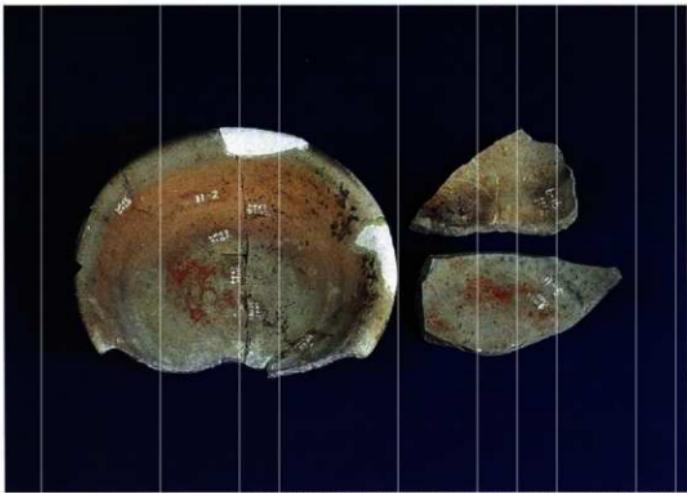
財団法人 山形県埋蔵文化財センター

寶山2遺跡調查區空中寫真（手前分南）





ST38住居跡出土原始灰釉陶器(第7図9)



赤色顔料付着土器(左第11図2、右上第6図16、右下第11図5)

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査をした、富山2遺跡の調査成果をまとめたものです。

富山2遺跡は山形県のほぼ中央部に位置する寒河江市にあります。寒河江市は西に朝日、月山、葉山を望むことができ、南・東・北を山形県の母なる川最上川と、寒河江川の両河川に囲まれた地で、「サクランボの里」として有名です。

この度東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）の建設工事に伴い、工事に先立って富山2遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、奈良～平安時代の堅穴住居跡8棟と、土坑や畝跡などが見つかりました。遺物では愛知県猿投窯で焼かれた須恵器をはじめ、赤焼土器、土師器、櫛、金属製品などが出土しました。遺跡自体がたびたび土砂崩れに遭う谷間にあることや、出土した遺物の内容を考えると山間の特色ある遺跡といえます。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓蒙・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成8年9月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木 場 清 耕

例　　言

1 本書は東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）建設工事に係る「富山2遺跡」の発掘調査報告書である。

2 調査は日本道路公団仙台建設局山形工事事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は下記の通りである。

遺跡名 富山2遺跡（C S G T Y 2） 遺跡番号 平成7年度登録

所在地 山形県寒河江市大字谷沢字富山

調査期間 発掘調査 平成7年7月10日～平成8年3月31日

現地調査 平成7年7月17日～平成7年8月12日

資料整理 平成8年4月 1日～平成8年9月30日

発掘調査・資料整理担当者（役職名は平成8年4月1日現在）

調査第一課長 佐藤 庄一

主任調査研究員 阿部 明彦

調査研究員 鈴木 良仁

嘱託職員 須賀井明子・松田亜紀子

4 発掘調査および本書を作成するにあたり、日本道路公団仙台建設局山形工事事務所、山形県寒河江建設事務所、西村山教育事務所、寒河江市教育委員会、西川町教育委員会等関係機関から協力をいただいた。また、現地調査にあたって、遺跡周辺の地形について阿子島功氏（山形大学）から、出土土器については柴垣勇夫氏（愛知県陶磁資料館）、浅田員由氏（愛知県陶磁資料館）、尾野善裕氏からご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

5 本書の作成・執筆は鈴木良仁、須賀井明子が担当した。編集は尾形與典、水戸弘美が担当し、全体については佐藤庄一が監修した。

6 委託業務は下記の通りである。

現地調査における平面図等の作成の一部については、アジア航測株式会社に委託した。

7 出土遺物、調査記録については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。

S T…堅穴住居跡	S K…土坑	S P…単独のピット
S D…溝跡	S X…性格不明遺構	
E K…遺構内の土坑	E P…遺構内の柱穴	E L…炉または竈跡
R M…金属製品	R P…括・登録土器	R N…自然遺物
R W…木製品、木柱		

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記の通りである。

- (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸はN-52°-Eを測る。
- (3) 遺構実測図は1/40・1/100・1/200・1/300縮図で探録し、各挿図毎にスケールを付した。遺物図版については任意の縮尺とした。
- (4) 遺構実測図のスクリーントーンは、焼土・焼砾・炭化物・礫・崩落土を示す。
- (5) 遺物実測図・拓影図は1/2・1/3・1/6で探録し、各々スケールを付した。
- (6) 遺物実測図中のスクリーントーンは黒色処理（ただし第7図9は原始灰釉陶器を示す）を、黒ペタは須恵器を示す。
- (7) 土器拓影図で、外側部分は左側、内側部分は右側に表示している。
- (8) 遺物図版中の番号は、挿図番号を示している。
- (9) 遺物観察表中の（　）内の数値は、図上復元による推定値、または残存値を示している。
- (10) 遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に掲った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の概要	
1 自然的環境	3
2 周辺の遺跡	3
III 遺構と遺物	
1 堅穴住居跡	7
2 土坑	11
3 そのほかの遺構	29
4 グリッド出土の遺物	30
IV 調査のまとめ	
1 遺跡の立地と遺構について	40
2 遺物と遺構の時期について	40
3 遺跡の性格について	43
報告書抄録	46

挿 図

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡概要図	4
第3図 遺構配置図・基本層序	5~6
第4図 S T37~40・43住居跡(1)	13~14
第5図 S T37~40・43住居跡(2)	15~16
第6図 S T37・38出土遺物実測図	17
第7図 S T38・39出土遺物実測図	18
第8図 S T39・43出土遺物実測図	19
第9図 S T43・40出土遺物実測図	20
第10図 S T40出土遺物実測図	21
第11図 S T40・10・12出土遺物実測図	22
第12図 S T12出土遺物実測図(1)	23
第13図 S T12出土遺物実測図(2)	24
第14図 S T10・12住居跡 S K9・11土坑	25~26

第15図	S T 61・S X20・S K 9 出土遺物実測図	27
第16図	S K 4・5・14・29・30土坑	28
第17図	歎跡・SD 1溝跡	31
第18図	S K 5・18・25・26・36 S X 3・歎跡B・グリッド出土遺物実測図	32
第19図	グリッド出土遺物実測図	33
第20図	土器分類図	45

表

表-1	竪穴住居跡観察表	12
表-2	遺構計測表	34
表-3	遺物観察表(1)	35
表-4	遺物観察表(2)	36
表-5	遺物観察表(3)	37
表-6	遺物観察表(4)	38
表-7	遺物観察表(5)	39
表-8	土器分類表(1)	41
表-9	土器分類表(2)	42
表-10	各遺構土器組成表	43

図 版

図版1	遺跡近景・調査風景	図版13	遺構写真(10)
図版2	遺跡遠景・近景(航空写真)	図版14	出土遺物(1)
図版3	基本層序・遺構確認状況	図版15	出土遺物(2)
図版4	遺構写真(1)	図版16	出土遺物(3)
図版5	遺構写真(2)	図版17	出土遺物(4)
図版6	遺構写真(3)	図版18	出土遺物(5)
図版7	遺構写真(4)	図版19	出土遺物(6)
図版8	遺構写真(5)	図版20	出土遺物(7)
図版9	遺構写真(6)	図版21	出土遺物(8)
図版10	遺構写真(7)	図版22	出土遺物(9)
図版11	遺構写真(8)	図版23	出土遺物(10)
図版12	遺構写真(9)	図版24	出土遺物(11)

I 調査の経緯

1、調査に至る経過

今回の富山2遺跡の発掘調査は、東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）の建設工事とともに実施されたものである。富山2遺跡は従来知られていなかった遺跡であるが、平成7年5月から財団法人山形県埋蔵文化財センターが調査を行った富山遺跡の発掘調査中に新たに発見され、平成7年度の財団法人山形県埋蔵文化財センターの新規事業として調査されることになったものである。

遺跡の発見の始まりは、富山遺跡北西の丘陵谷間の平坦地から、かつて土器が出土したとの情報が6月初旬に地元の方から富山遺跡の現地調査事務所に寄せられたことによる。富山遺跡の調査員が現地を確認したところ須恵器や赤焼土器が出土することを確認し、すぐに山形県教育庁文化財課に連絡をした。その後、6月13日から6月15日に県文化財課による遺跡詳細分布調査が行われ、遺構や包含層が確認されたため正式に富山2遺跡として新規に登録された。しかし、遺跡の範囲が東北横断自動車道酒田線の建設用地内であるため、日本道路公団仙台建設局山形工事事務所、山形県教育庁文化財課、財団法人山形県埋蔵文化財センターの関係機関で遺跡の取り扱いについて協議された結果、記録保存を行うこととなり、平成7年7月17日から平成7年8月12日まで緊急発掘調査が行われることになったものである。

2、調査の方法と経過

今回の調査はA区とB区合わせて1,300m²を対象として行った(第2図)。現地調査は上記の経過をふまえて、7月17日に現地で鍵入れ式を行い調査を開始した。B区は県文化財課による詳細分布調査によって表土が除去され、遺構が検出された状態になっていたので、A区の表土の除去から開始した。表土の除去はバックホーとキャリヤーを用いて行った。表土除去が終わったところから4メートル四方のグリッドを設定した。グリッド軸はY軸方向をアルファベット、X軸方向をアラビア数字として、Y軸とX軸の交点から東へ広がる象限をX軸とY軸を組み合わせて呼称した。その後は人力による面整理を行なながら遺構の検出につとめた。検出した遺構から順次台帳に登録し、堅穴住居などの大型の遺構には土層観察用のベルトを残して掘り下げ、小型の遺構は半裁して掘り下げ、土層断面図や土層注記が済んだものから取り外し、必要に応じて写真記録を行った。現地調査は8月12日で終了している。遺物分布図や1/100の遺構配置図は手取りで行い、1/40の遺構実測図と最終的な遺構配置図は委託実測を行った。遺物の取り上げは、遺構内出土の遺物は出来るだけ出土地点の記録を行い一括遺物の把握につとめた。遺構外出土遺物に関しては、完形遺物や重要と思われる遺物について出土地点の記録を行った。遺物の取り上げ層位は、遺構内出土遺物については覆土の上面から順次掘り下げていき、便宜的に上からF1・F2・F3というふうに取り上げ、床面出土遺物に関しては「Y」で取り上げた。遺構外出土遺物は、遺跡が地滑りや崩壊によってたびたび土砂の堆積があったために層位的に取り上げることが出来なかつたので、出土地点(グリッド・遺構)を記録するにとどまった。



- | | | |
|----------------------|-----------------|-----------------|
| 1 富山 2 遺跡(奈良～平安) | 12 明神山遺跡(旧石器) | 23 左沢城跡(南北朝～元和) |
| 2 富山遺跡(旧石器) | 13 うぐいす跡(縄文) | 24 中谷沢遺跡(縄文) |
| 3 平野山古墳群(縄文・奈良・平安) | 14 草薙遺跡(縄文) | 25 廬則山遺跡(縄文) |
| 4 高松Ⅰ遺跡(平安) | 15 高松Ⅰ遺跡(縄文・平安) | 26 上谷沢遺跡(縄文) |
| 5 高松Ⅱ遺跡(縄文・奈良～平安・中世) | 16 山岸遺跡(縄文) | 27 富沢Ⅰ遺跡(縄文) |
| 6 菅衣呂者屋敷遺跡(奈良～平安・中世) | 17 向原遺跡(縄文) | 28 富沢Ⅱ遺跡(縄文) |
| 7 磐瀬山遺跡群(旧石器～中世) | 18 金谷原遺跡(旧石器) | 29 西観寺遺跡(旧石器) |
| 8 三条遺跡(縄文・古墳・平安) | 19 高松Ⅳ遺跡(平安) | 30 日和田遺跡(縄文) |
| 9 石田遺跡(縄文・弥生) | 20 柴橋窯跡(平安) | 31 白岩遺跡(中世～近世) |
| 10 寒河江城跡(室町) | 21 柴橋蛇塚遺跡(縄文) | 32 木ノ沢掘跡(平安・中世) |
| 11 平塩經塚(縄文～室町) | 22 石持原遺跡(縄文) | |

第1図 遺跡位置図(1:50,000)

II 遺跡の概要

1、自然的環境

富山 2 遺跡がある寒河江市は東に奥羽山脈、西に月山や朝日連峰、北に葉山、南に藏王を望むことの出来る自然景観豊かな地である。この地には、古くには旧石器時代から中世まで各時代にわたる数多くの遺跡が立地している。

富山 2 遺跡は標高約160～174mの谷間の小さな平坦地に立地し、調査区の東側には夏でも枯れることのない小さな泉が沢となって流れている。付近の基盤は凝灰岩と考えられ、風化した凝灰岩粒が覆土に混じったり、凝灰岩の転石が調査区内に見られた。また、地形と遺跡の関係に関して山形大学人文学部阿子島功教授から次のような教示を得ている。

「発掘範囲は、富山遺跡のへ延びる尾根（高度220～170m）の鞍部（高度175～170m）およびその西側の谷底斜面（高度約165m）である。

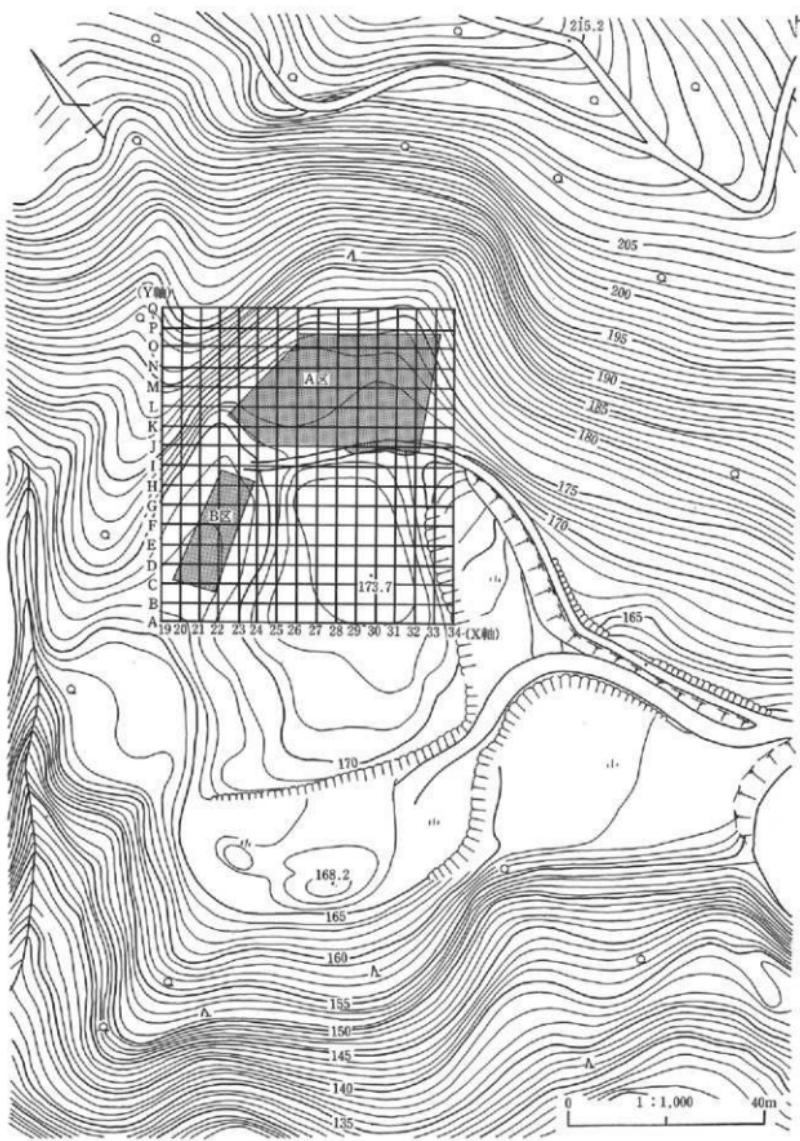
地形の概形は、古い地滑りの滑落斜面（発掘区の北側、幅50m・奥行き70m）、崩積斜面（発掘区およびA区南西の尾根）のように見える。この地滑りの跡地に、奈良・平安時代の住居が営まれた。住居はいくたびか建て替えられているが、その間にも2次的に背後の斜面が小さな地滑りや崩壊を生じて、黒土や風化した凝灰岩の岩屑が流下した。発掘区北壁に見える黒土と風化凝灰岩の互層がこのことを示している。発掘区の東西両側に小沢があり、黒土の堆積も多い。

1200～1300年間の崩積層の堆積の厚さは、発掘区（北側）上部で1.5m、A区中央部の住居跡の所で約1m、西側谷沿いで約1.5m（上部）から1m（下部）になる。」

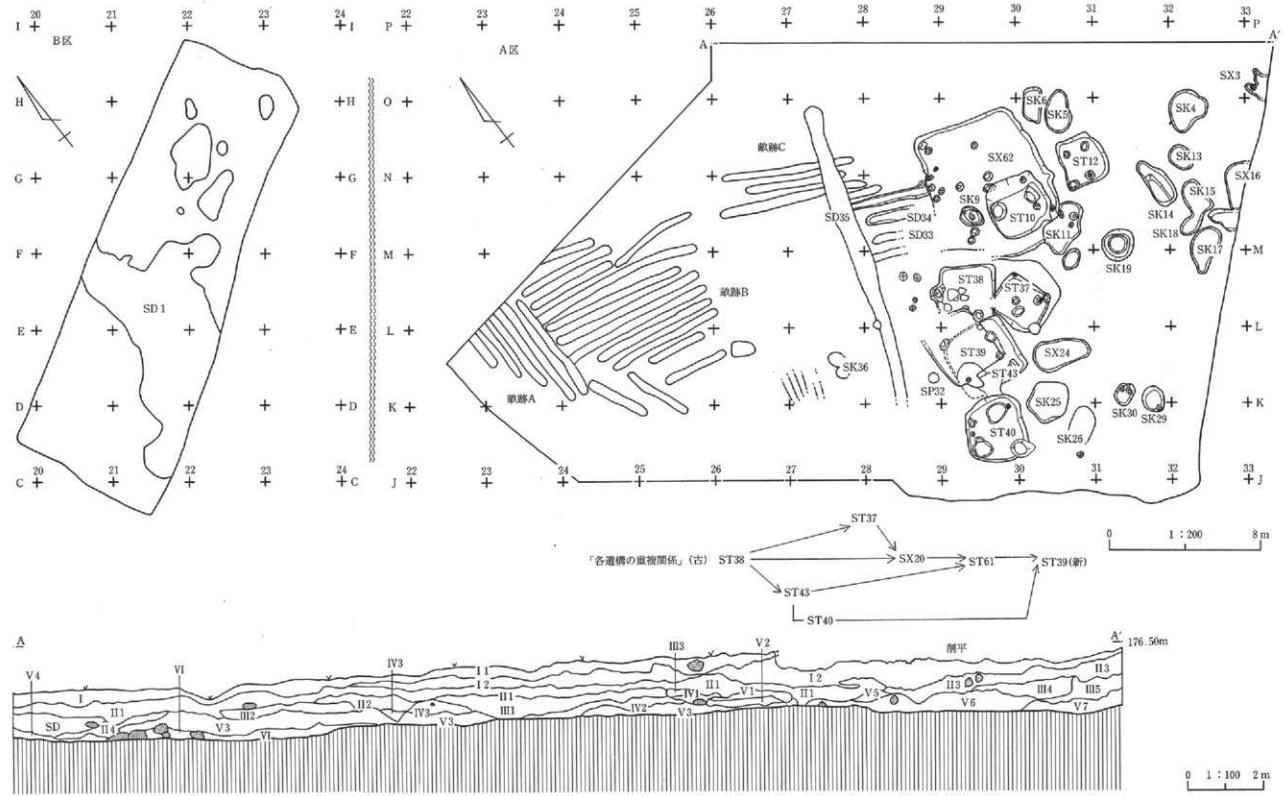
2、周辺の遺跡

富山 2 遺跡の立地する寒河江市は、当初陸奥の国に属していたが、古代出羽国が和銅5年（712年）に建置されて以来、最上郡に属し、仁和2年（886年）以降は村山郡に属するようになった。村山郡は大山、長岡、村山、大倉、梁田、徳有の六郷からなっていた。このように寒河江市周辺は早くから律令体制に組み込まれていった。それを裏付けるように地方官衙と密接な関係にある須恵器窯（平野山古窯跡群）や、条里造構と考えられる条や坪という地名が見られる。特に高瀬山周辺は古代の遺跡が密集しており、長岡郷の中心地と考えられる所である。

富山 2 遺跡の南東約200mの尾根上には、富山 2 遺跡発見のきっかけとなった旧石器時代の富山遺跡が立地し、沢を隔てた対岸には中世の左沢城跡があり、調査区からも曲輪が観察できる。周辺には、奈良時代から平安時代にかけて営まれた平野山古窯跡群が尾根を一つ隔てた平野山の東南斜面に位置しており、直線で約1kmから2kmの範囲である。また、直線で1.2km南東の尾根筋には木ノ沢櫛跡があり、平安時代の堅穴住居跡が確認されており、時期的にも富山 2 遺跡と併行か近接した時期と考えられる。一般に奈良時代から平安時代の遺跡は、高瀬山周辺の遺跡の立地から明らかなように、沖積地の微高地や河岸段丘上に立地する事が多いが、富山 2 遺跡や木ノ沢櫛跡のように山間地に立地することは希で、平野部の微高地や河岸段丘上に立地する遺跡と性格の違いを窺わせる。



第2図 遺跡跡概要図



基本層序

- I-1 10YR2/2 黒褐色シルト 小礫多く含む。植物根很多。表土層。
- I-2 10YR2/2 黒褐色シルト I-1層に似るが、植物根很少。
- II-1 10YR3/3 暗褐色シルト 黒色シルトが部分的に入り、風化礫粒を含む。
- II-2 10YR4/4 暗褐色シルト 暗褐色シルトを斑状に含み、凝灰岩粒を含む。
- II-3 10YR2/2 黒褐色シルト 布リーヴ色シルトを斑状に含み、風化礫粒を含む。層上部は少々茶色味が強い。
- SD N 1.5/0 黑褐色シルト 風化砂を含む。層上部は少々茶色味が強い。
- II-4 10YR3/3 暗褐色シルト 黑色粘質シルトを斑状に含み、風化礫粒を含む。
- III-1 10YR2/3 黑褐色粘質シルト 蘭色砂を縦状に含む。風化砂・縦凝灰岩粒を含む。
- III-2 10YR2/3 黑褐色シルト 黑色シルトが斑状に入り、風化礫粒を含む。

- III-3 10YR4/3 黄褐色シルト 蘭砂・バニス?
- III-4 10YR2/2 黑褐色粘質シルト 黑色風化礫灰岩粒を多量に含む。
- IV-1 2.5Y3/3 深黄褐色風化質シルト 赤色風化礫灰岩粒を多量に含む。風化オリーブ色シルト 蘭砂 黑色シルト 蘭砂を斑状に含む。葉緑酸鉄を含む。
- IV-2 10YR2/3 黑褐色粘質シルト 黑色砂質シルトを縦状に含む。風化砂を含む。
- IV-3 2.5Y2/2 黑褐色粘質シルト 黑色砂質シルトを斑状に含み、須磨片と凝灰岩粒を含む。
- V-1 10YR4/4 黑褐色シルト 黑色粘質シルトを斑状に含み、須磨片と凝灰岩粒を含む。
- V-2 10YR2/3 黑褐色シルト 黑色シルトが斑状に入り、黑色粘質シルトを斑状に含む。黑褐色粗砂混じりシルト 黑褐色シルトとにい、黄色砂質シルトを斑状に含む。黑褐色粗砂混じりシルト 黑褐色シルトを縦状に含む。

- V-3 10YR5/8 黄褐色粗砂 黑暗灰岩岩・にい、黃褐色シルト質砂を縦状に含み、暗褐色粗砂を縦状に含む。凝灰岩を小塊混じる。
- V-4 10YR4/6 黑褐色シルト を斑状に含み、風化砂少く含む。
- V-5 10YR4/4 黑褐色シルト 黑褐色シルトを縦状に含む。
- V-6 10YR5/4 にい、黃褐色シルト質砂・岩質砂・3~4cmの凝灰岩を大量に含む。
- V-7 10YR7/5 にい、黃褐色シルト質砂・岩質砂・にい、黃褐色礫を多く含んで、風化砂を含む。
- VI 10YR4/2 黑褐色粗砂 黑褐色粘質シルトを縦状に含み、明黄褐色シルト質砂を斑状に含み、凝灰岩を含む。

第3図 遺構配置図・基本層序



III 遺構と遺物

遺構は比較的平坦なA区に密集しており、A区の西側には歎跡、東側には竪穴住居跡を中心に多くの遺構が見つかった。ちょうど竪穴住居が営まれたところはA区の中でも緩やかな谷底の部分で、平坦な場所を選地し続けたためにはほとんどの住居が重複したと思われる。B区は沢跡と考えられる自然遺構1条が見つかった。A・B区に凝灰岩の転石があり、竪穴住居跡の側まで転がっているものもあり、たびたび転石があつたことが窺える。

1. 竪穴住居跡

今回の調査では8棟の竪穴住居跡が確認された。個別の竪穴住居跡の詳しい観察は12ページの表-1にまとめてあるので、ここでは簡単な発掘所見と、それぞれの竪穴住居跡から出土した遺物について述べる。

ST37 (遺構・第4~5図 遺物・第6図)

平面形は東西2.37m、南北2.7mのほぼ長方形をなし、床面はやや起伏があり、壁は緩やかに立ち上がる。カマドは南壁西寄りに1基認められたが、遺存状態は不良であった。床面から偏平な河原石が2個出土したが、被熟の痕跡や擦り痕は特に認められなかった。ST38の壁の一部を掘り込んでいることから、ST38より新しい。遺物の出土は多くはなかつたが、EP44の周辺や北東の隅に偏る傾向が認められた。

須恵器壺(第6図1、2)のうち、2は焼成が不良で赤褐色を呈している。3は須恵器小型壺の下半分と考えられ、焼成が良好であり、体部と高台の接合部分にケズリを施す。須恵器蓋(同図4~6)のうち4はEP44覆土からの出土で、内面を覗に転用している。7は土師器壺の底部で外表面はケズリ、内面はナデ調整を行っている。赤焼土器壺(同図8~11)のうち11はEL42からの出土である。12は外表面にタクタキ痕、内面にアテ痕がある須恵器壺で、第15図8(SX20出土)と同一個体と考えられる。

ST38 (遺構・第4~5図 遺物・第6~7図)

平面形は東西2.89m、南北は約3m前後と考えられ、壁の立ち上がりは上部は緩やかで下部はほぼ垂直である。床面はほぼ平坦である。床面上から多量の炭化層(第4図)と、炭化材(第5図)が検出されたことから焼失家屋と考えられる。EP49は炭化層の下から検出された。その形状からロクロピットと考えられる。住居中央部に位置することが多いが、本例は住居の壁の中央にある。切り合ひ関係は、ST38の上にSX20が堆積し、ST38-SX20をST61が切っている。遺物は、層的には床面や覆土の下部から多くの遺物が出土し、面的には北壁と東壁の際に集中して出土した。炭化層(第4図38-6)より下から出土した遺物(取り上げ層位はF4・F5・Y)は遺棄時における一括遺物と考えられる。

須恵器壺(第6図13~16)のうち13・14は底部が回転ヘラ切りである。15は回転糸切りで底径の割に器高が低く皿状をなす。同一個体がST12床面からも出土しているが、住居の南東部がST39・ST43と切り合っているためにST38から流失してST12に入り込んだと思われる。16は体部下部に回転ヘラケズリを施し、内面に擦り痕が認められ、赤色顔料が付着している。17は須恵器壺と考えられるもので、口端の直下に沈線が一条巡る。須恵器壺

(18・24) のうち18は口縁部が短く直立する短頭壺と考えられる。24も短頭壺と考えられ、器面全面に被熱と思われる火はねがみられる。須恵器蓋(19~23)はいずれも天井部にケズリを行っている。21は外面の口縁に墨が付着し、内面は硯に転用しており、22も天井部に墨が付着し、内面も硯に転用している。土師器甕(第7図1~2・7~8)のうち1・2は外面下部にケズリを施し、内面にはハケメ調整を行う比較的大型の甕である。7は底部に木葉痕と粗痕が認められる。8は体部で、内外面にハケメ調整を施す。器面の外面に付着した粘土が熱を受けて器面と密着している。赤焼土器甕(3~5)は比較的小型のものである。土師器椀(6)は底部のみで全体の器形は不明であるが、内面にミガキを施し黒色処理をし、アンペラ様の圧痕を底部に残す。9は愛知県猿投窯産の原始灰釉陶器で、O-10期に該当する。胴部と頸部の接合は3段構成となり(図版15右上)頸部に2本の沈線が巡り、火表の部分に自然釉が流下している。二次焼成のため体部の釉が剥落し、器面がはじけている。住居の北東壁際からバラバラの状態で出土した。10は表面にミガキを施し4面を黒色処理を行っていることから黒色土器と分類した。第19図6の土器の胎土と良く似ている。11は鉄製の刀子で住居の北隅から出土した。櫛(12)は材を木目に沿って切り込みを入れ、歯を付けたものである。そのほか非常にやすく実測をとることが出来なかつたが、幾層にも薄い紙状のものを重ねたものが床面から出土した(図版15右側上から4段目右の写真的右側の遺物)。

ST39(遺構・第4~5 遺物・第7~8図)

平面形は東西3.09m・南北3.38mの隅丸方形をなす。壁の立ち上がりは急で、南隅寄りの床面に焼土、床面中央部に角柱状の焼石があった。カマドは南壁の西寄りにEL41があり、両側に袖石がある。ST43・ST61・ST38・SX20を切っている。遺物は西壁の際とEL41の周りの床面から集中して出土した。

須恵器壺(第7図13~19・第8図1~4)のうち、第7図14は口端の部分が屈曲している。第8図2は底部に「主」の墨書がある。4は内面底部に赤色顔料が付着している。須恵器高台付壺(5)はST39からは1点のみの出土である。稜椀(6)はEL41内から出土した。ST39出土の他の土器より古いと考えられる。須恵器蓋(7~13)のうち、7はつまみの端をナデて天井部にケズリがあり、内面に擦り痕と墨痕が見られる。口縁部に墨書があり「東カ東」と読み取れる。8は天井部をケズリかナデ調整を行っている。9は床面の焼土内から出土し、天井部にケズリがある。10はつまみの端をなでて天井部にケズリがある。11はつまみの端をナデて天井部にケズリを施している。12は天井部にケズリがある。また外面の端に墨書があり「主」と読み取れ、口縁が2ヶ所波状にゆがむ。13は天井部にケズリがあり、体部との境は角をなし、口縁端部が直立するものでST39の他の蓋とは形状が異なる。7~11は口縁端部を折り返すという特徴のある形状をなす。赤焼土器甕(14~20)のうち14~16・17~19~20は大型の甕で、15は中型、18は小型の甕である。土師器甕(21)は覆土上面からの出土で、底部にケズリを行い、内面はハケメ調整を行っている。底部中央部がやや突出して、直立させると不安定である。

ST40(遺構・第4~5図 遺物・第9図~11図)

平面形は東西3.03m、南北3.48mの隅丸のゆがんだ方形をなす。壁の立ち上がりはやや急で、床面は平坦である。カマドは南隅にEL46がある。住居の中央から北・西・東角に放射状に焼土が分布し、南壁西寄りに炭化材があった。また住居中央部のやや東寄りに偏平な河原石があった。床面の焼土の分布や炭化材の存在などから焼失家屋の可能性がある。ST43を切っており、ST39に切られていることからST43より新しくST39より古い。遺物の出土量は多かったが、床面出土遺物や完形品の出土は少なく、覆土からの出土が多いことから異なる時期の遺物の混在が考えられる。

ST40出土の須恵器壺（第9図12～16、第10図1～2・4～5）は、底部切り離しや器形が異なるものが存在する。第9図12は回転糸切りで底径が広い。13は12の器形と似るが、底部ヘラ切り後ナデ調整を行い、体部の下部に手持ちヘラケズリを行っている。14は底部回転糸切りで体部が外湾気味に立ち上がる。16は底部を失っているが回転糸切りと考えられ、体部が内湾気味に立ち上がる。第10図3は高台の部分が剝落しているが須恵器高台付壺と考えれる。ヘラ切りで、EK47覆土の出土である。須恵器壺（6～8）のうち6と7は底部が上げ底風で、体部の最下端が突出し体部が内湾しながら立ち上がり、器厚も壺よりやや厚いので壺とした。8は口端が丸くなり、体部が弯曲している。須恵器壺（9～10・15～16）のうち9・10は体部上半を失っているが長頸か短頸の壺と考えられ、いずれも回転ヘラ切りで10は体部下半にケズリが行われている。15は口縁と底部を失っているが、球胴形をなす短頸壺と考えられる。器面の内外面をロクロ調整を行って、外面の下部には縦方向のケズリが行われ、亜みがある。16は直立した口縁を持つ直口壺で、球胴形体部の最大径のやや上の部分に耳を持つ。焼成は良好で耳の角の部分と、体部の一部に横方向のケズリを行っている。今回の調査では耳が一個しか確認されなかつたが双耳または四耳と考えられる。破片は床面のみでなく付近のグリッドからも出土している。須恵器蓋（11～13）のうち11は天井部をケズリ、口端部を折り曲げており、内面に擦り痕が見られる。12は口端が直立する。13はつまみを持たず、ケズリやナデを行わない。須恵器甕（14）は覆土からの出土である。赤焼土器甕（17～22）のうち18はEL46から倒立した状態で出土した（図版9）。20は小型の壺で焼成が良好である。土師器甕（第10図23～25・第11図1）はいずれも底部である。23は外面をケズリ調整、内面はナデとハケメ調整を行い、底部中央が突出している。24は木葉痕があり、25は体部の立ち上がりの部分に横方向のケズリがあり、底部にはハケメ状のナデの跡がある。第11図1は外面はケズリ、内面はハケメを施す。第10図23と同じように底部中央が突出している。

ST43（遺構・第4～5図 遺物・第8図22～23・第9図）

平面形は東西3.6m、南北3.29mの隅丸方形をなし、壁の立ち上がりは急で床面は平坦である。カマドは南壁のやや西よりにEL45があったが、袖の部分は確認できなかつた。ST43はST61・ST39・ST40によって切られており、ST38を切っている。遺物の出土は多くなかった。

須恵器壺（第8図22・第9図1～5）のうち第8図22は外面に火はねが認められる。床面出土であるが、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、底径が大きく体部が直立気味に立ち

上がるなど、ST43出土の他の須恵器より古いと考えられる。第9図1～5は回転糸切りで、底径が大きい。5はEP51覆土からの出土である。土師器壺（第8図23）はロクロ成形と考えられるが、底部の切り離しや外面の調整は器面が磨滅しており不明であるが、内面をミガキ、黒色処理を施し、体部は内湾気味に立ち上がる。ST43出土の他の土器より古い可能性がある。土師器壺（第9図8）は体部外面下部にケズリ調整、内面は縦方向にハケメ調整を行うもので、小破片がST40・37覆土からも出土している。赤焼土器壺（6～7・9）のうち7はEL45からの出土である。9はロクロ成形のみで、他の調整を行っていない。10は底部を失っているが、赤焼土器壺と考えられ、内面底部に下から上に向かってナデかケズリを行う。外面に付着した粘土が被熟して器面に密着して焼き固まっている。赤焼土器壺（11）は外面にケズリとタタキ、内面にアテ痕がある。

ST61（遺構・第4～5図 遺物・第15図）

平面形などは不明である。EP50・58・EL53が伴う。現地調査の段階ではEL41とEL53の重なりから住居の存在は予想されていたが、その後のセクション図と平面図の検討から再確認された。そのため示した遺物はEL53から出土した遺物のみである。それ以外の遺物は、プランがST39とほぼ重なると考えられ、床面の高さもST39の床面がST61の床面よりも低いために、ST39が作られたときに無くなってしまったと考えられる。

須恵器蓋（第16図1）は天井部にケズリを施し、焼成は良好である。土師器壺（2～3）はいずれもロクロ成形で、外面はケズリ調整、内面はハケメ調整を行う。

ST10（遺構・第14図 遺物・第11図）

平面形は東西3.17m、南北3.14mの歪んだ隅丸の方形をなす。壁の立ち上がりは北壁（尾根側方向）が緩やかで他の壁は急な立ち上がりをなす。床面は緩やかな起伏があり南壁中央と南東隅に焼土が認められた。遺物の出土状況は散漫で、偏りのあるような状況は認められなかった。床面出土土器は第11図7の壺の底部と、10の南壁中央の焼土から出土した赤焼土器壺だけである。そのほかは小破片であった。

須恵器壺（第11図2～5）のうち2は内湾しながら立ち上がり、口縁部が角を形成するほど屈曲する。内面の底部付近に赤色顔料が付着している。3も内湾しながら立ち上がり口縁がやや外反する。4はやや外反しながら立ち上がり、口径が大きいが、器高が低い。5の内面にも赤色顔料が付着している。須恵器高台付壺（6）はほぼ直線に立ち上がる。7は須恵器壺の底部と考えられる。器面の内外面にケズリとナデ調整が施される。須恵器鉢（8）はロクロ成形のあと体部下部にケズリを施す。赤焼土器壺のうち、9は表面が磨滅しており、10は床面の焼土から出土した。

ST12（遺構・第14図 遺物・第11～13図）

平面形は東西2.2m、南北2.51mと小型で、南西隅が一部はみ出した歪んだ方形をなす。壁の立ち上がりは急で、南壁中央付近に焼土が認められる。遺物は、面的には南西に多く北東は少ない。層位的には床面から覆土にかけて須恵器の壺と高台付壺を中心多く多くの遺物が出土した。遺構の覆土は、遺構自体が斜面を掘り込んで作られているために、北東（尾根）側が厚く南西（谷）側が薄いという状況を示す（第14図）。遺物の出土状況は、ST12が

尾根側の土砂で、ある程度埋まりかけた時に土器が捨てられたと考えられ(図版11)、覆土出土の遺物と床面出土遺物は、廃棄または遺棄時の一括遺物と考えられる。

須恵器壺(第11図11~15・第12図1~15)のうち第12図7は内面に墨様の付着物がある。10は口縁部が屈曲している。13は内面底部に赤色顔料が付着している。14は底部に墨書が認められ「由」と読み取れる。須恵器高台付壺(第12図16~18・第13図1~3)はすべて付高台で、体部がやや内窪しながら立ち上がり口縁が外反する。土師器壺(第13図4・5)のうち4は底部の下部をわずかに削り、疑似高台となる。内面の黒色処理が熱で消えている可能性もある。5は内側を黒色土器を施したもので、体部の上半部に横方向のナデを行っている。6・8は土師器高台付壺で、高台の部分を削り出すかつまみ出すかして、わずかな高台が付き、内面をみがいて黒色処理を施している。須恵器蓋(7)は口縁端部の形状が丸みを帯び、本遺跡のほかの蓋とは口端部の形状が異なる。須恵器壺(9)は口縁を失っているが、高台付のやや大型の鉢と考えられ、ゆがみがある。須恵器壺(11)は外面下部にケズリ、内面にハケメ調整を施す。赤焼土器壺(10)は小型のものである。赤焼土器壺(12・13)のうち13は大型の壺と考えられる。赤焼土器壠(14・16・17)のうち16は口端が丸くなる形状をなす。粘土塊(15)被熱して焼き固まつたもので、ほかにも同様のものがST12から1点出土している。赤焼土器の壺の胎土に似て、混合物は含まれていない。

2、土坑

今回の調査で16基の土坑が確認された。このうち、SK29・30・4・14・5・9・25・18・26土坑について取り上げる。

SK29(遺構・第16図)

浅い皿状をなし、覆土はシルト質で赤焼土器片や炭化粒を含む。遺物は細片で図示出来るものはなかった。

SK30(遺構・第16図)

覆土はシルト質で、炭化粒や炭化材を含む。底は平底となり、壁は焼けていた。遺物は赤焼土器の細片を含んでいたが、図示できなかった。

SK4(遺構・第16図)

不整の楕円形をなし、覆土は斜面上方(山側)からの流れ込みの様相を示す。遺物は少量の赤焼土器細片を含む。遺物は図示できなかった。

SK14(遺構・第16図)

不整の円形をなし、南西側が一段低く掘り込まれている。覆土はシルト質で赤焼土器の細片を少量含む。

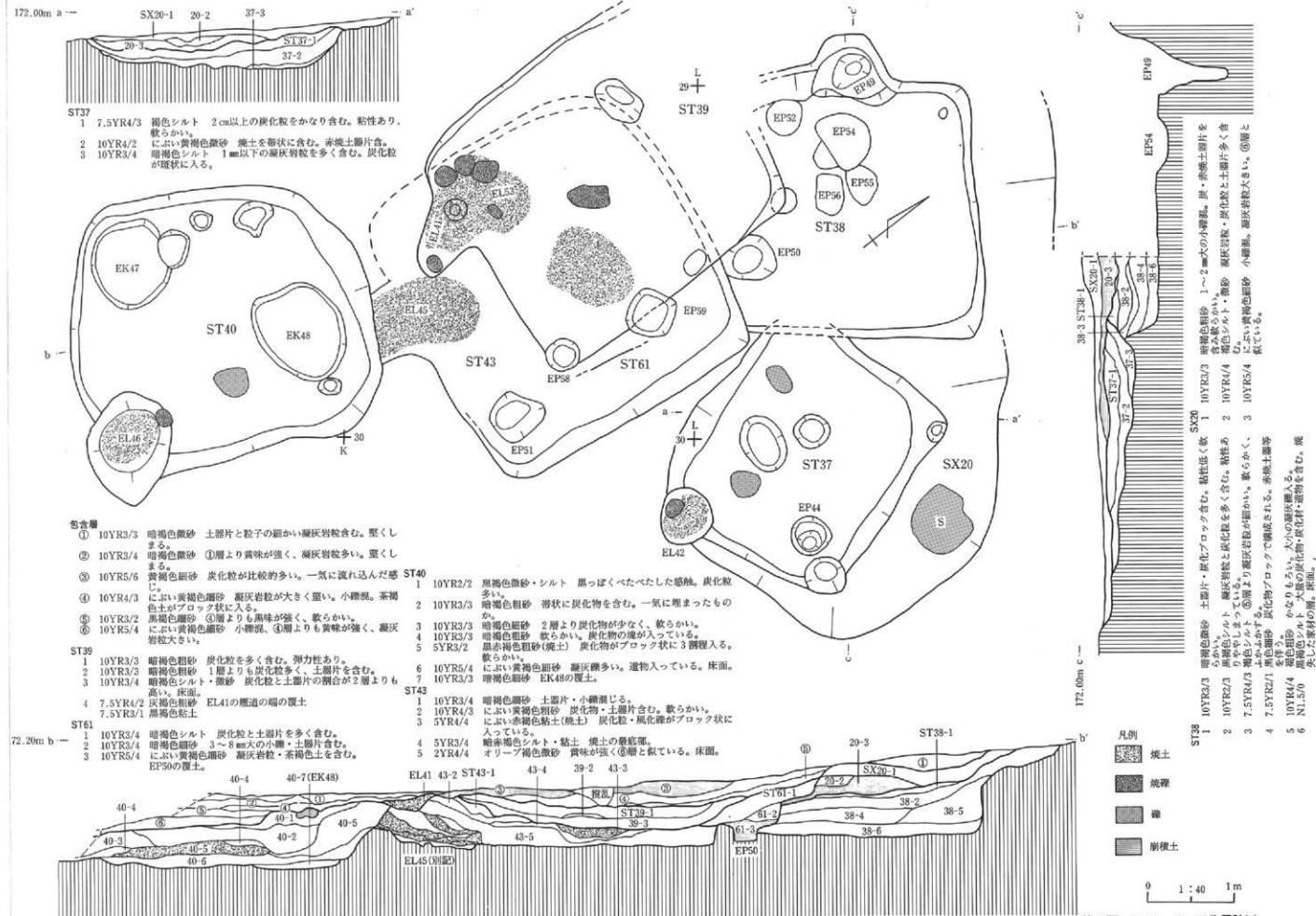
SK5(遺構・第16図 遺物・第18図1~2)

長楕円形をなし、床面はほぼ平底になる。覆土は赤焼土器・須恵器の細片を含む。図示できた遺物(第18図1~2)はいずれも覆土からの出土である。赤焼土器壠(1)は大きさの割に器厚が厚く、外面にケズリを施す。土師器壠底部(2)は外面にケズリ、内面にハケメ調整が施されている。

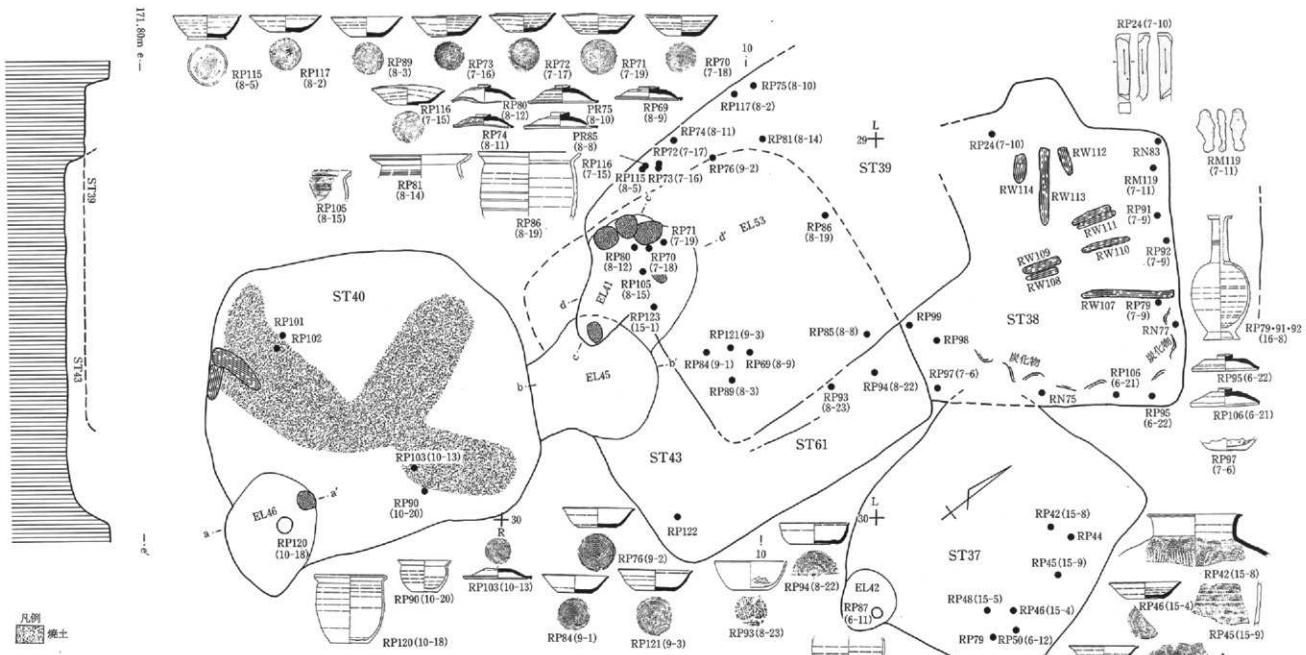
表-1 積穴住居跡観察表

項目	住居跡No	ST10	ST12	ST37	ST38
位置(グリッド)		M・N-29・30	M・N-26・31	K・L-29・30	L-28・29
規模(cm)	東西 317 南北 314	東西 220 南北 251	東西 237 南北 270	東西 269 南北(300)	
平面形	圓丸の込んだ正方形	一部強張り出した長方形	圓丸のほぼ長方形	一部凸状に張り出した方形	
主輪方位	N-15°-E	N-19°-E	N-22°-W	N-57°-W	
遺存状態	やや良好	良好	やや良好	良好	
確認面からの深さ(cm)	16~40	9~31	40	83~92	
壁の立ち上がり	北傾斜やか他急	急	やや緩やか	上部傾斜やか下部急	
床面状況	起伏あり	西寄りにやや傾斜	やや起伏あり	ほぼ平坦	
柱穴等	EP 4基	EP 4基	EP44 他4基	EP49 EP52 他5基	
埴土 塗石 良化物	両角部・南壁中央部に埴土	南壁中央部に埴土	—	埴土5層に良化材・良化物	
カマドNo	—	—	EL42	—	
位置	—	—	南北寄り	—	
住居主軸に対する割れ	—	—	3°-E	—	
遺存状態	—	—	不良	—	
規模	—	—	長さ66幅61	—	
袖部	—	—	不明	—	
焼土	—	—	燃焼部中央	—	
重複開基	なし	なし	ST38→ST37→SX20	ST38→ST43→ST40	
遺物伴回	第11回2~10	第11回11~第13回17	第6回1~12	第6回13~第7回12	
参考				焼失家屋	
遺構伴回	14	14	4・5	4・5	
遺構回版	10	11	4・8	5・8	

項目	住居跡No	ST29	ST40	ST43	ST61
位置(グリッド)	K・L-28・29	J・K-29・30	K・L-29・30	(K・L-29)	
規模(cm)	東西 309 南北 338	東西 363 南北 348	東西 360 南北 329	—	
平面形	圓丸のほぼ長方形	圓丸のほぼ長方形	圓丸のほぼ長方形	不明	
主輪方位	N-2°-E	N-57°-W	N-7°-E	N-12°-E	
遺存状態	やや不良	やや良好	やや良好	不良	
確認面からの深さ(cm)	29~39	47~67	18~53	16~62	
壁の立ち上がり	急	やや急	急	不明	
床面状況	北寄りにやや傾斜	ほぼ平坦	平坦	不明	
柱穴等	不明	EK47・48 EP4基	EP51・59	EP50・58 他2基か	
埴土 塗石 良化物	南北寄りに焼土 中央部に塗石	中央から北・西・東角に放射状に焼土 南壁南北寄りに良化材	—	—	
カマドNo	EL41	EL46	EL45	EL53	
位置	南北西寄り	南北部	南北やや西寄り	南壁西寄り	
住居主軸に対する割れ	29°-W	2°-N	E-E	(10°-W)	
遺存状態	やや良好	やや良好	やや良好	不良	
規模	長さ145 幅104	長さ130 幅95	長さ144 幅128	不明	
袖部	両側に袖石	北側に袖石	不明	不明	
焼土	燃焼部～一道	燃焼部中央	燃焼部～煙道	燃焼部	
重複開基	ST43→ST61→ST39	ST43→ST40→ST39	ST38→ST43→ST61	ST43→ST61→ST39	
遺物伴回	第7回13~第8回21	第9回12~第11回1	第8回22~第9回11	第15回1~3	
参考					
遺構伴回	4・5	4・5	4・5	4・5	
遺構回版	6・8	8・9	7・8	8	



第4図 ST37~40・43住居跡(1)



EL46(ST40)

- 1 2.5YR6/6 明黄褐色 壊石不明。火を受けてもろくボロボロになっている。
- 2 2.5YR4/6 オーラープ褐色 砂、灰々均質な砂層である。
- 3 10YR3/3 黄褐色シルト層、30°角と板状の1層で風化泥炭岩粒含む。
- 4 10YR4/4 褐色シルト ブロック状に赤褐色微砂(焼土)入る。炭化物ブロックを帶状に含む。1層(くずれのよき)砂粒層。
- 5 7.5YR2/3 暗褐色シルト層、薄い焼土ブロックを斑状に含む。炭化物微量。
- 6 5YR3/3 暗褐色シルト(焼土) 繁らかく風じり気がない。
- 7 10YR4/3 におい黄褐色微砂 炭化ブロック少額。この部分はあまり火を受けていない。

EL45(ST43)

- 1 7.5YR4/4 海色シルト 細砂を含む。
- 2 10YR3/4 暗褐色シルト(焼土) 細砂、炭土を斑状に嵌入。炭化物微量含む。30°角と板状の1層で風化泥炭岩粒含む。
- 3 10YR4/4 褐色砂質シルト 南西面に従って、焼土の割合が大きくなる。炭化物・炭灰岩板を含む。
- 4 10YR4/4 褐色砂質シルト、非常に軟らかい。熱土を土の割合が大きくなる。炭化物・炭灰岩板を含む。
- 5 7.5YR3/4 暗褐色シルト 層内に焼土ブロックで含み、5層を斑状に含む。炭化物・炭灰岩板を含む。
- 6 10YR2/3 黑褐色シルト 上部に焼土層を含み、焼土粒・炭灰岩粒を少量、炭化物を微量含む。

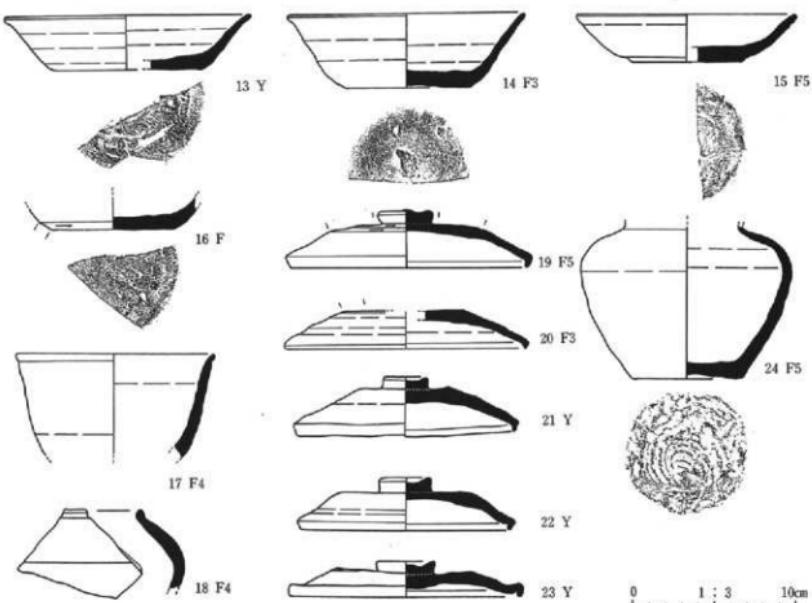
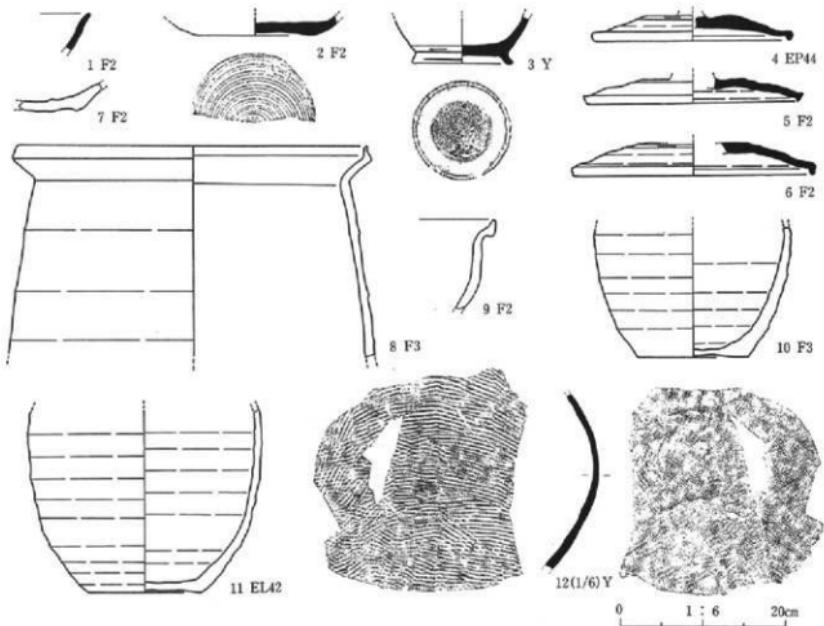
EL41(ST39)

- 1 7.5YR3/4 暗褐色シルト(焼土) 3層を薄く層状に含み、炭化物を微量含む。
- 2 5YR5/8 明褐色シルト(焼土) 3層を斑状に含み、炭化物を微量含む。30°角と板状の1層で風化泥炭岩粒含む。
- 3 10YR3/4 暗褐色シルト(焼土) 一部的に風化泥炭岩を含む。
- 4 10YR3/4 暗褐色シルト 1層を板状で少量炭化物を微量含む。
- 5 5YR3/2 暗褐色シルト(焼土) 3層と同様だが、明褐色砂質シルトを斑状に含み、炭化物・炭灰岩を少量含む。
- 6 10YR3/4 暗褐色シルト(焼土) 1層と炭化物・炭灰岩を含む。
- 7 10YR4/4 暗褐色シルト(焼土) 1層を斑状に含む。
- 8 10YR4/4 暗褐色シルト(焼土) 1層を板状に含み、炭化物を微量含む。

EL53(ST51)

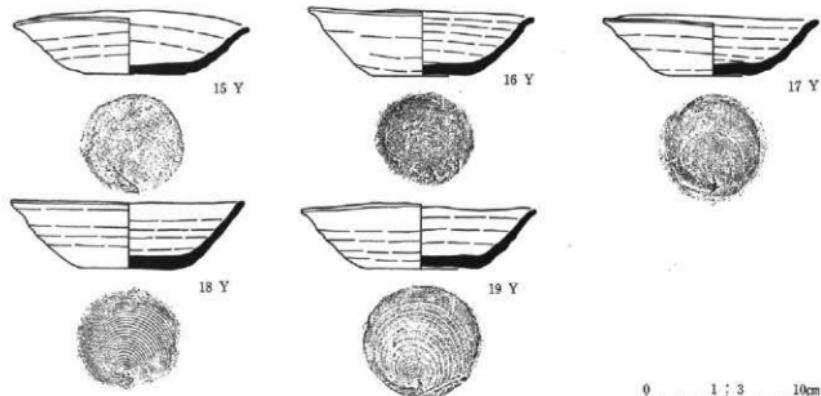
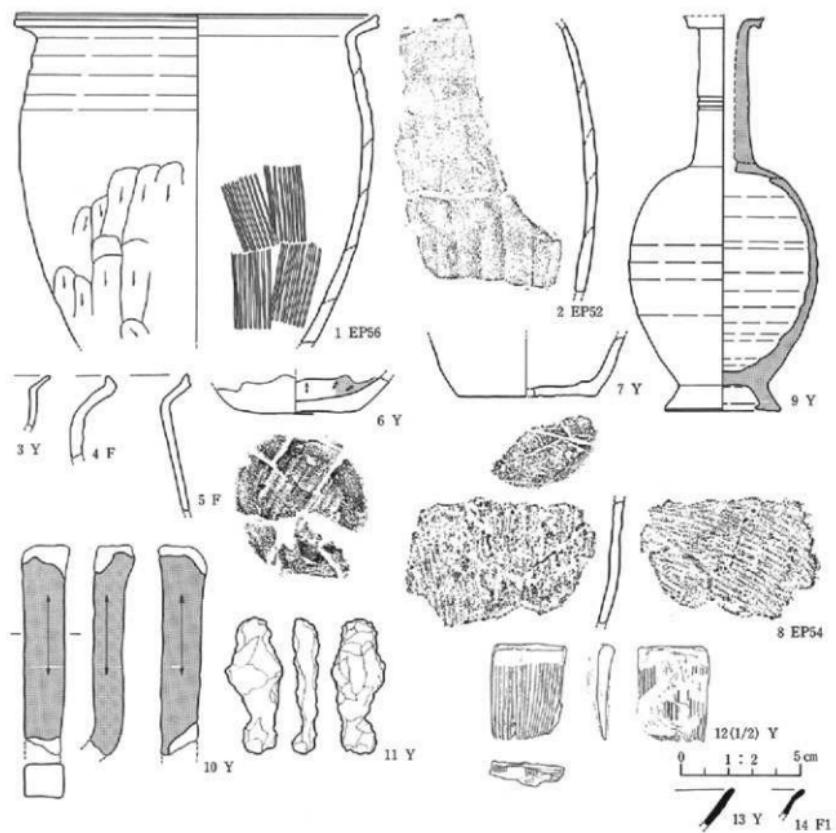
- 1 10YR3/4 暗褐色シルト(焼土) 炭化物・炭灰岩粒を少量含む。
- 2 7.5YR5/8 明褐色シルト 上部にグラデーション風に炭化物シルトを含み、焼土を斑状に含む。炭化物を微量含む。
- 3 10YR3/4 暗褐色シルト(焼土) 1層を板状で少量炭化物を微量含む。
- 4 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト(焼土) 1層を板状で少量炭化物を微量含む。
- 5 10YR3/4 暗褐色砂質シルト(焼土) 烧成大さき。焼土粒・炭化物を少量含み、炭灰岩板を含む。
- 6 10YR3/4 暗褐色砂質シルト(焼土) 粘性土を少量含み、焼土粒を少額。
- 7 10YR4/4 暗褐色シルト(焼土) 1層を斑状に含む。
- 8 10YR4/4 暗褐色砂質シルト(焼土) ブロック状に粘土を含み、土層片・炭灰岩板を少量含む。

第5図 ST37~40・43住居跡(2)



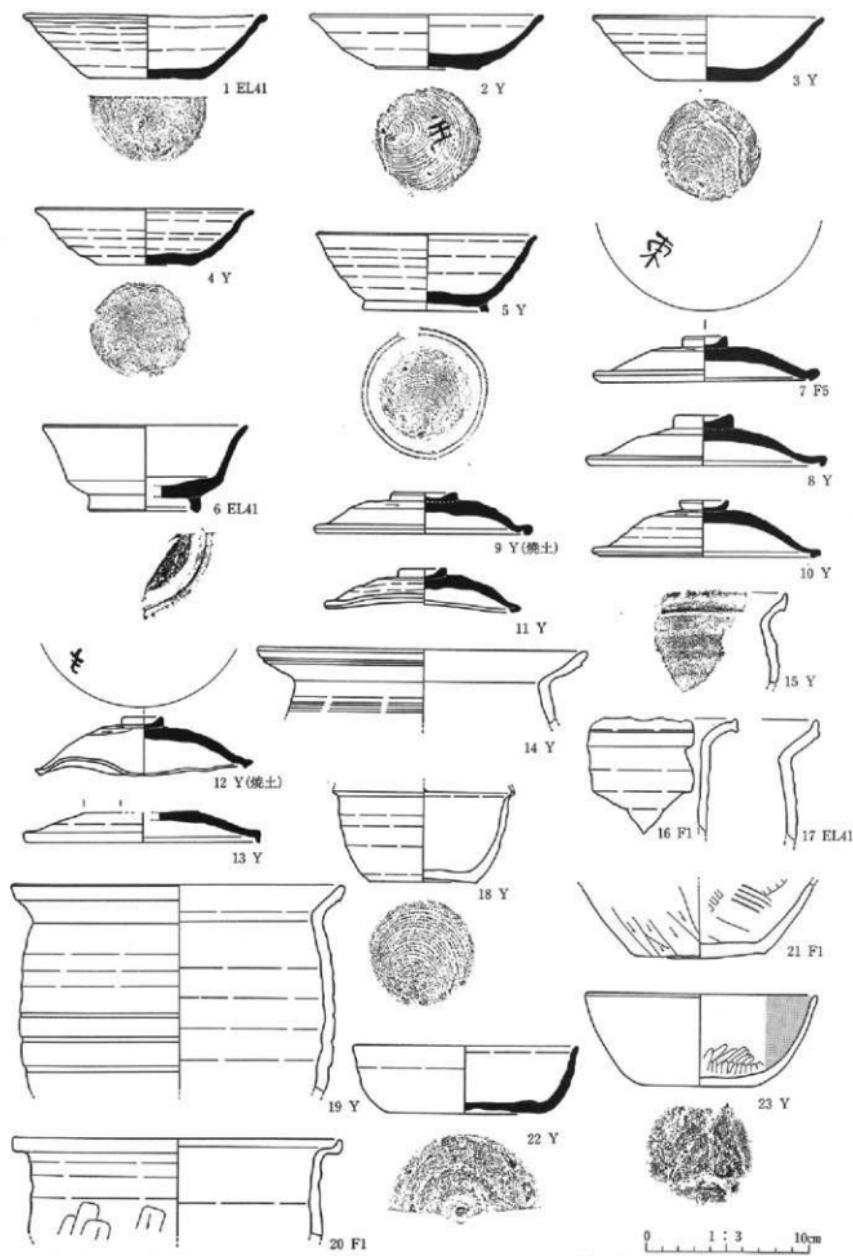
1~12(ST37), 13~24(ST38)

第6図 ST37・38出土遺物実測図

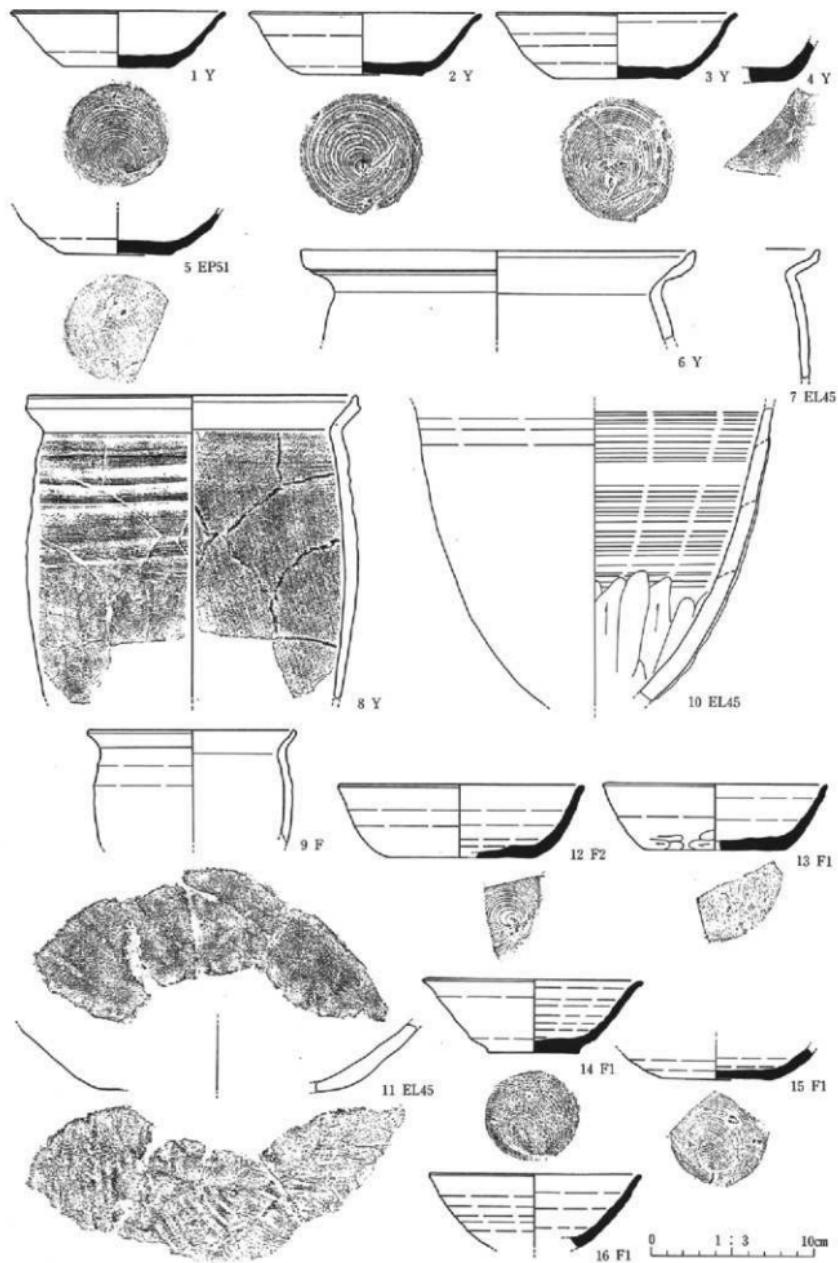


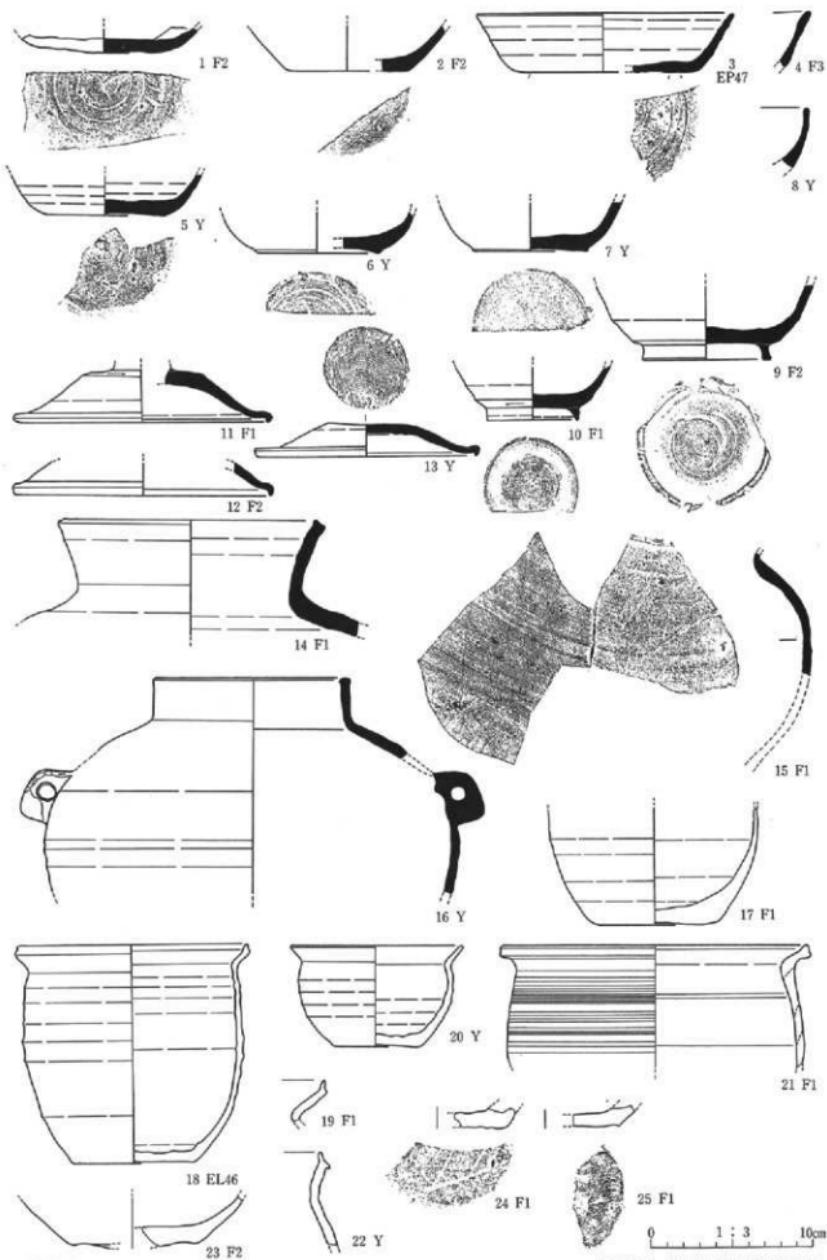
1~12(ST38), 13~19(ST39)

第7図 ST38・39出土遺物実測図



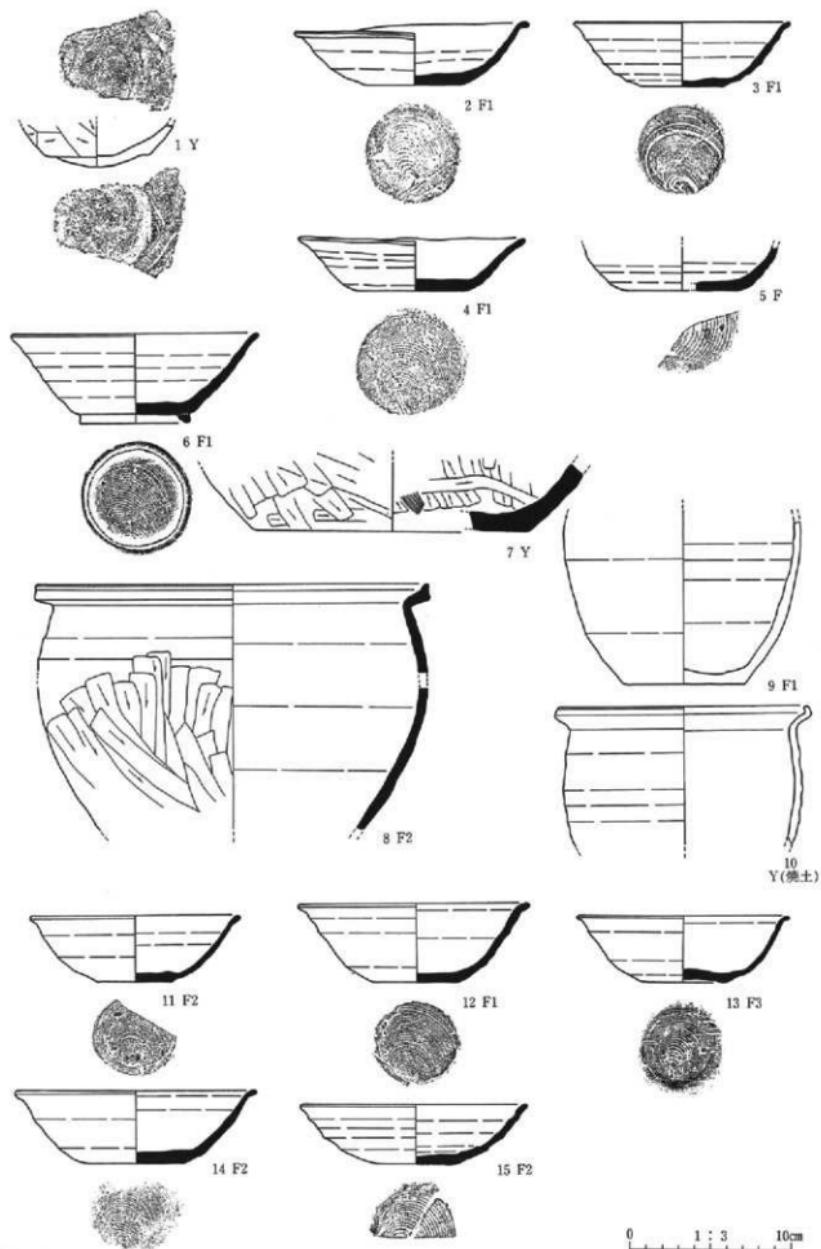
第8図 ST39・43出土遺物実測図





1~25(ST40)

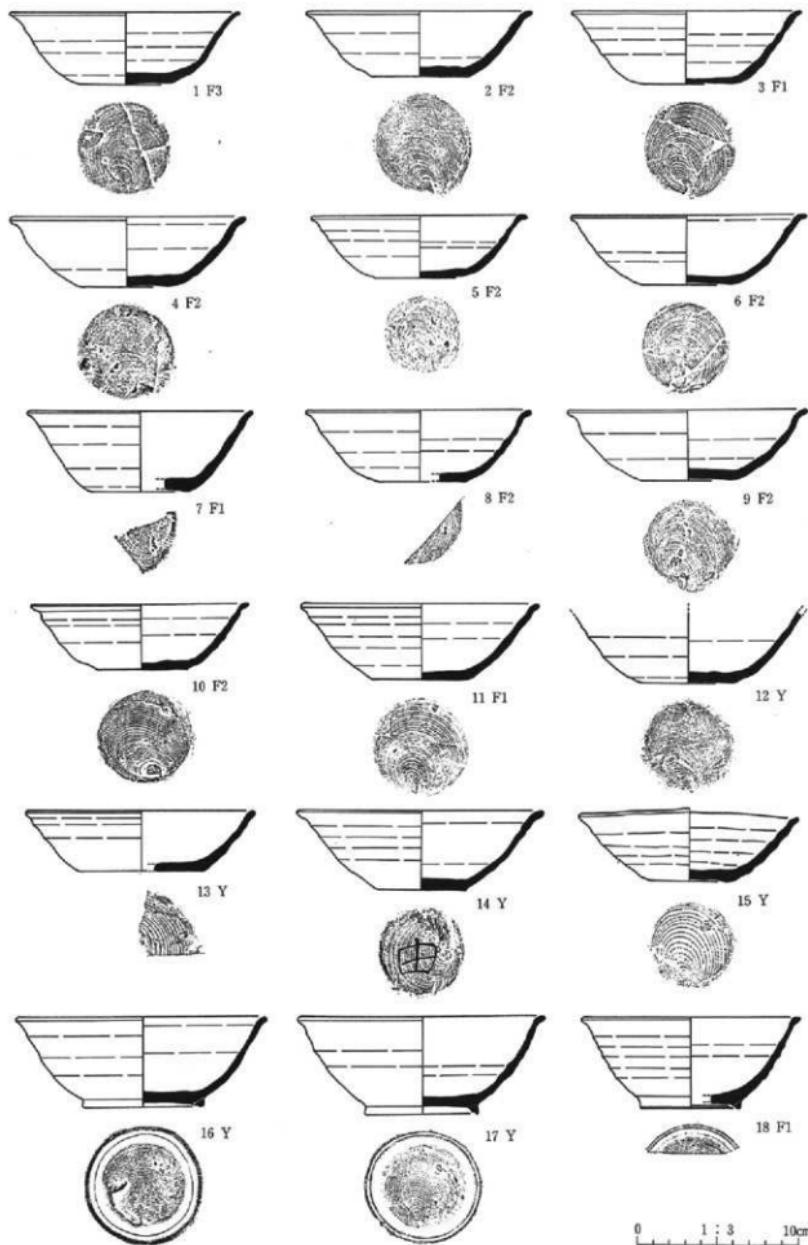
第10図 ST40出土遺物実測図



1(ST40), 2~10(ST10), 11~15(ST12)

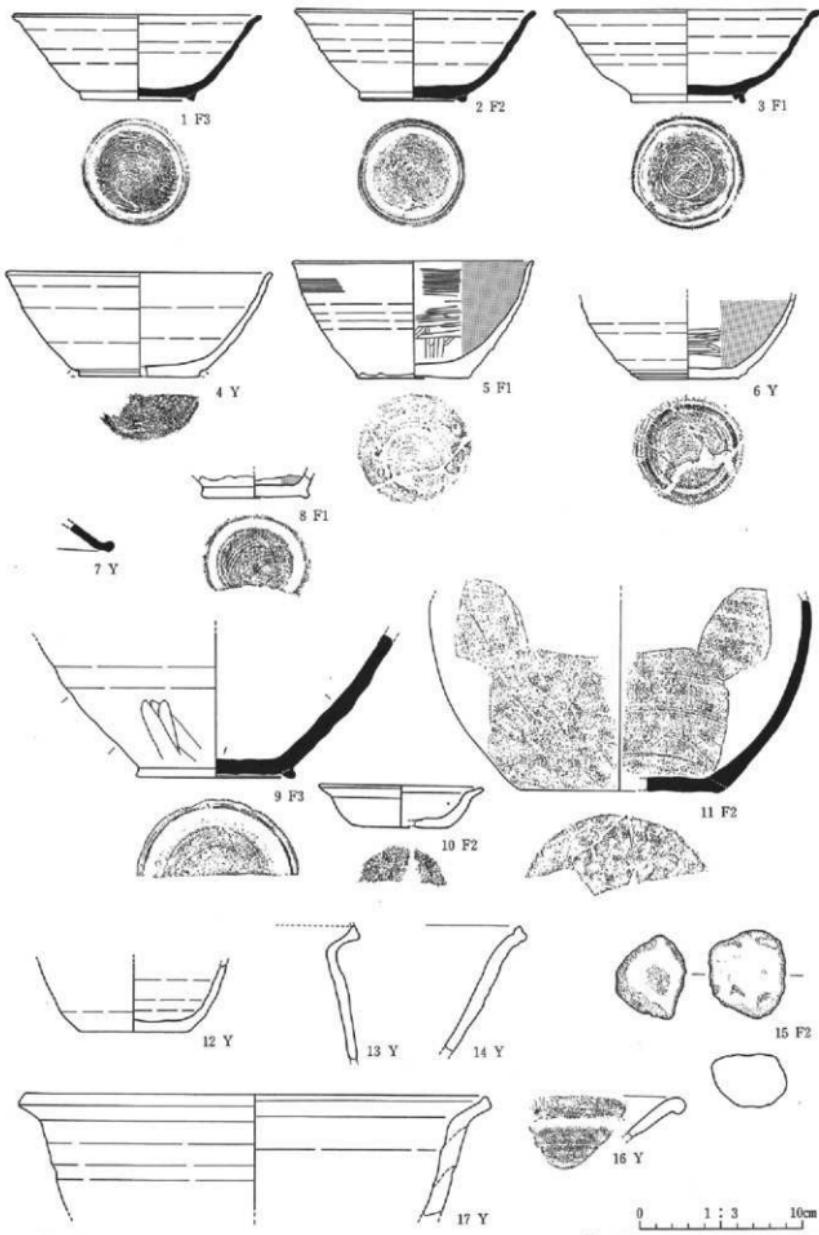
第11図 ST40・10・12出土遺物実測図

0 1 : 3 10cm



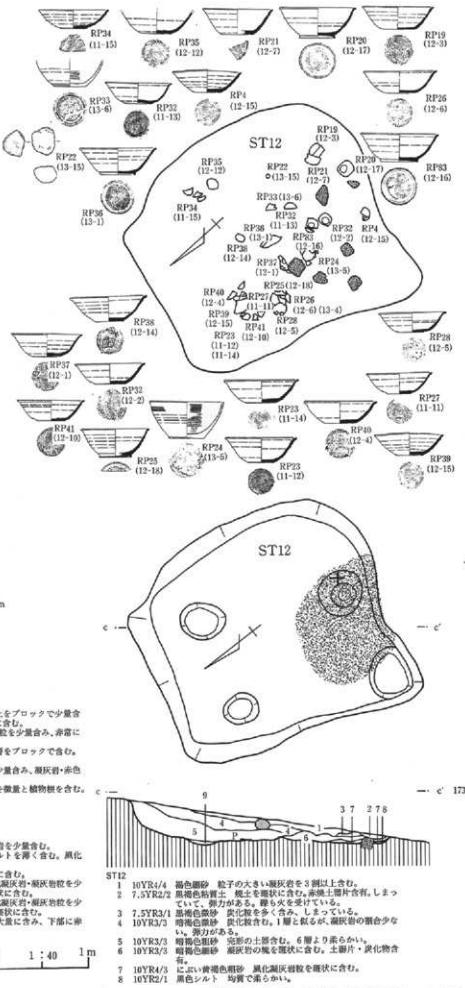
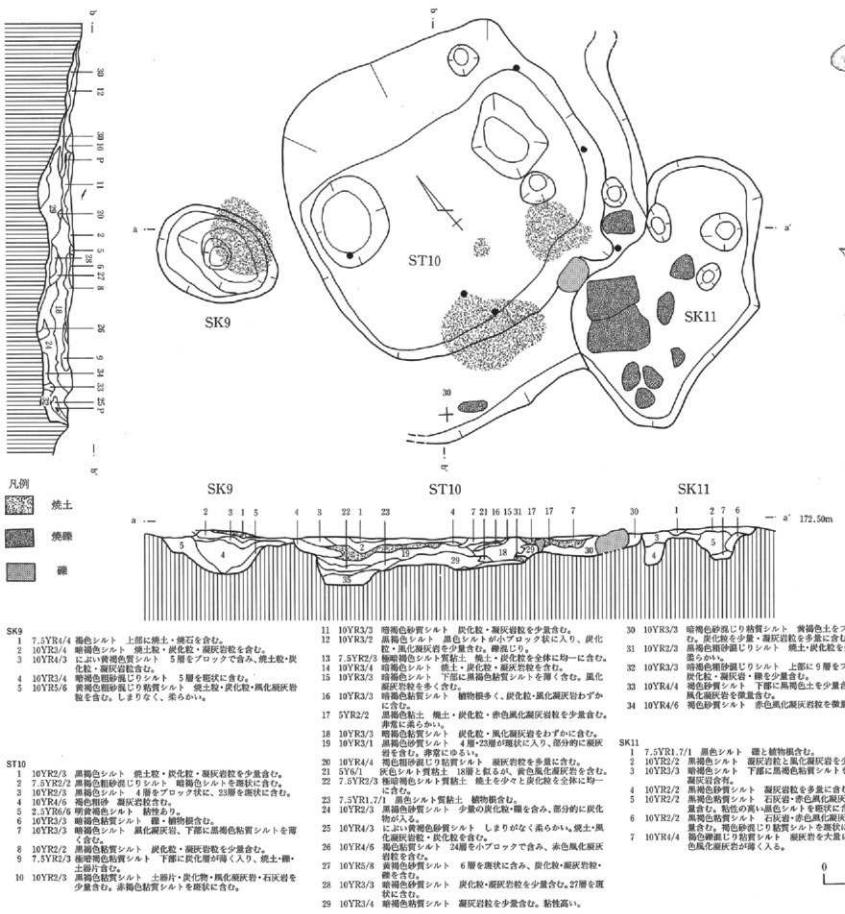
1~18(ST12)

第12図 ST12出土遺物実測図

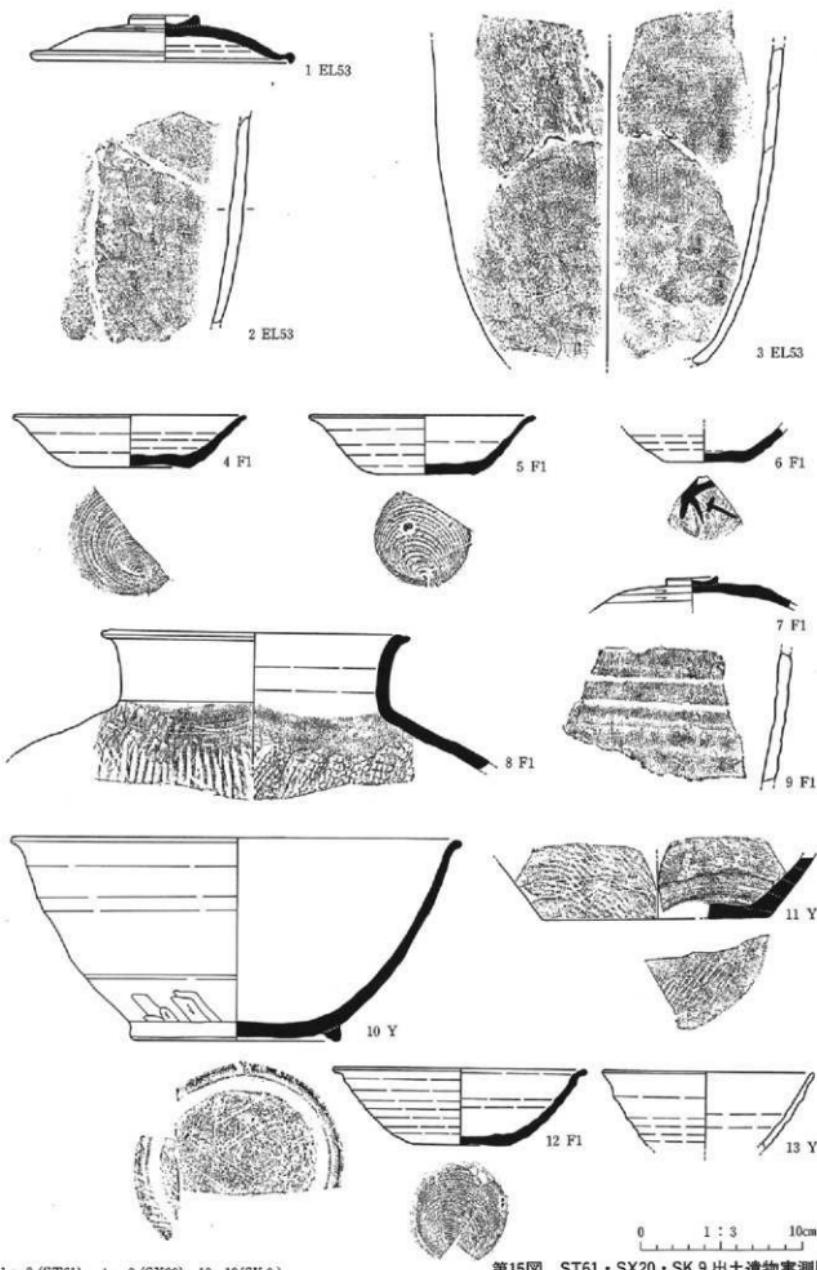


1~17(ST12)

第13図 ST12出土遺物実測図(2)

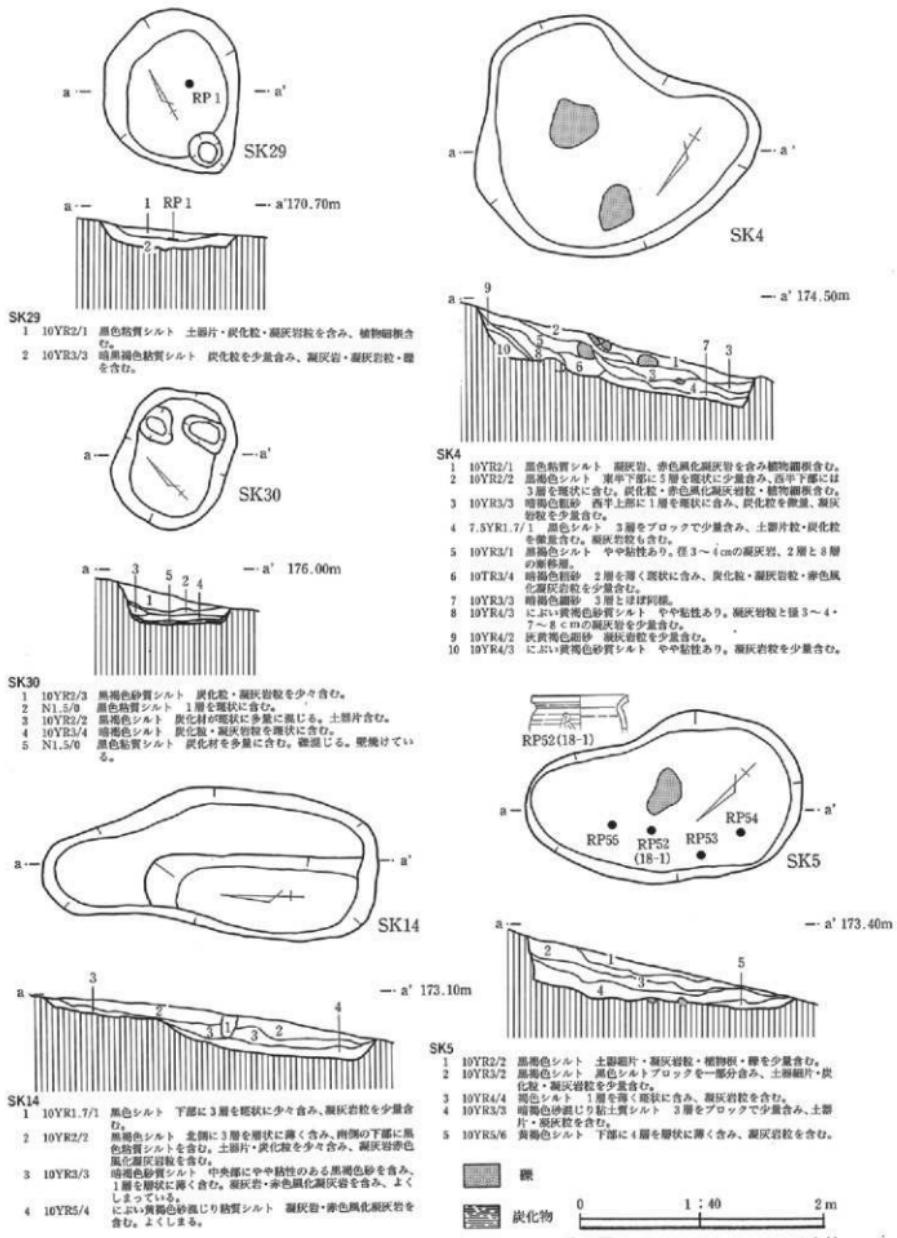


第14図 ST10・12堅穴住居層SK9・11土坑



1~3 (ST61), 4~9 (SX20), 10~13 (SK 9)

第15図 ST61・SX20・SK 9 出土遺物実測図



第16図 SK 4・5・14・29・30土坑

SK9 (遺構・第14図 遺物・第15図)

梢円形をなし、覆土上部に焼土を含み、比較的多くの遺物を含む。遺物4点を図示した。須恵器鉢(10)は高台が付き、体部下部にケズリを行う。破片がST10・12の覆土からも出土している。11は須恵器壺か鉢の底部と考えられる。外面にタタキ調整後ヘラナデを行い、内面にヘラナデを行っている。須恵器壺(12)は体部が膨らみながら立ち上がり、口縁が屈曲ぎみに外反する。赤焼土器壺(13)は器高がやや高いもので底部を欠損している。

SK25 (遺構・第3図 遺物・第18図)

南北方向に長梢円形をなす。黒褐色の細砂質土をなし、炭化物・土器片が混じる。遺物は3点図示した。須恵器壺(4)は回転ヘラ切りで、底径が大きい。5は須恵器壺の口縁部破片である。赤焼土器鉢(6)はやや高めの高台が付き、器厚が厚い。破片が小さく全体の器形が良くつかめないので鉢以外の器種であることも考えられる。

SK18 (遺構・第3図 遺物・第18図)

SK15と重複している。覆土に風化した凝灰岩粒が入る。遺物は須恵器壺(3)1点を図示した。回転糸切りで底径がやや大きく、体部がほぼ直線状に立ち上がり口縁部がやや外反する。ロクロ目が大きく内面に擦り痕が見られる。

SK26 (遺構・第3図 遺物・第18図)

不定形な形をしている。出土遺物はプランを確認した段階で出土したものである。遺物は3点を図示した。須恵器高台付壺(8)は、底部の切り離しが、切り離し後に調整を行っているので不明である。9は須恵器双耳壺の取手で、体部方向にケズリを行っている。10は土師器壺の底部で、外面をケズリ、内面をナデ調整を行っている。

3、そのほかの遺構

SX20 (遺構・第4～5図 遺物・第15図)

ST37～39・61と重複する性格不明の落ち込み遺構で、切り合い関係からST38・37より新しく、ST61・39よりも古い。性格の明瞭な遺構と異なり、本遺構単独の遺物のとらえ方は出来なかったので、図示した6点もそれぞれが時期の異なる可能性があるが、ST37から出土した須恵器壺と同一個体と考えらるる遺物があることや、ST37をほぼ覆っていることから、ST37と近接した時期の遺物と考えられる。

須恵器壺(4～6)はいずれも回転糸切りである。4・5は体部が直線状に立ち上がり口縁がやや外反する。6は底部に墨書きがあり「奉カ本」と読みとることが出来る。須恵器蓋(7)は天井部にケズリを施し、内面は擦り痕が見られる。須恵器壺(8)は外面にタタキ、内面にアテ痕が見られる。第6図12とタタキやアテ痕が似ていることから同一個体と考えられる。9は赤焼土器壺の体部破片で、外面はロクロ目とケズリ、内面はロクロ目がある。この土器はSX20覆土上面として取り上げたが、調査の早い段階で取り上げたためSX20を覆っている包含層出土の可能性もある。

SD1 (遺構・第17図)

B区から検出された検出長約10mの沢跡と考えられる自然遺構で、覆土は黒色のシルトに凝灰岩粒が混じる。遺物は赤焼土器や須恵器の磨滅した小片がわずかに出土した。

歟跡A・B（遺構・第17図 遺物・第18図）

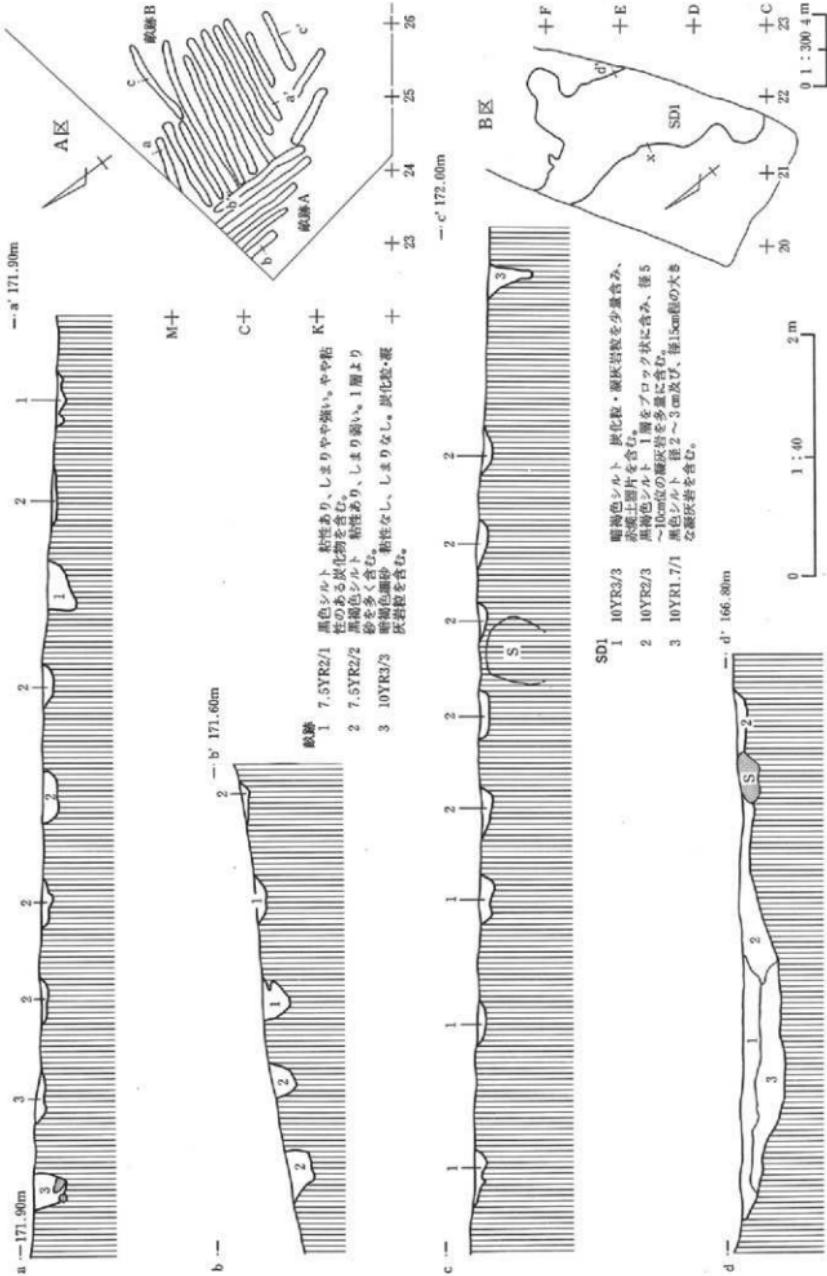
A区西側で検出された歟跡で、ほぼ磁北に沿ったAと東西方向のBがある。各条からは赤焼土器の小片が出土した。第18図12はBから出土した赤焼土器の壺である。切り合い関係からBが古い。覆土からは古代の遺物のみが出土しており古代のものと考えられる。

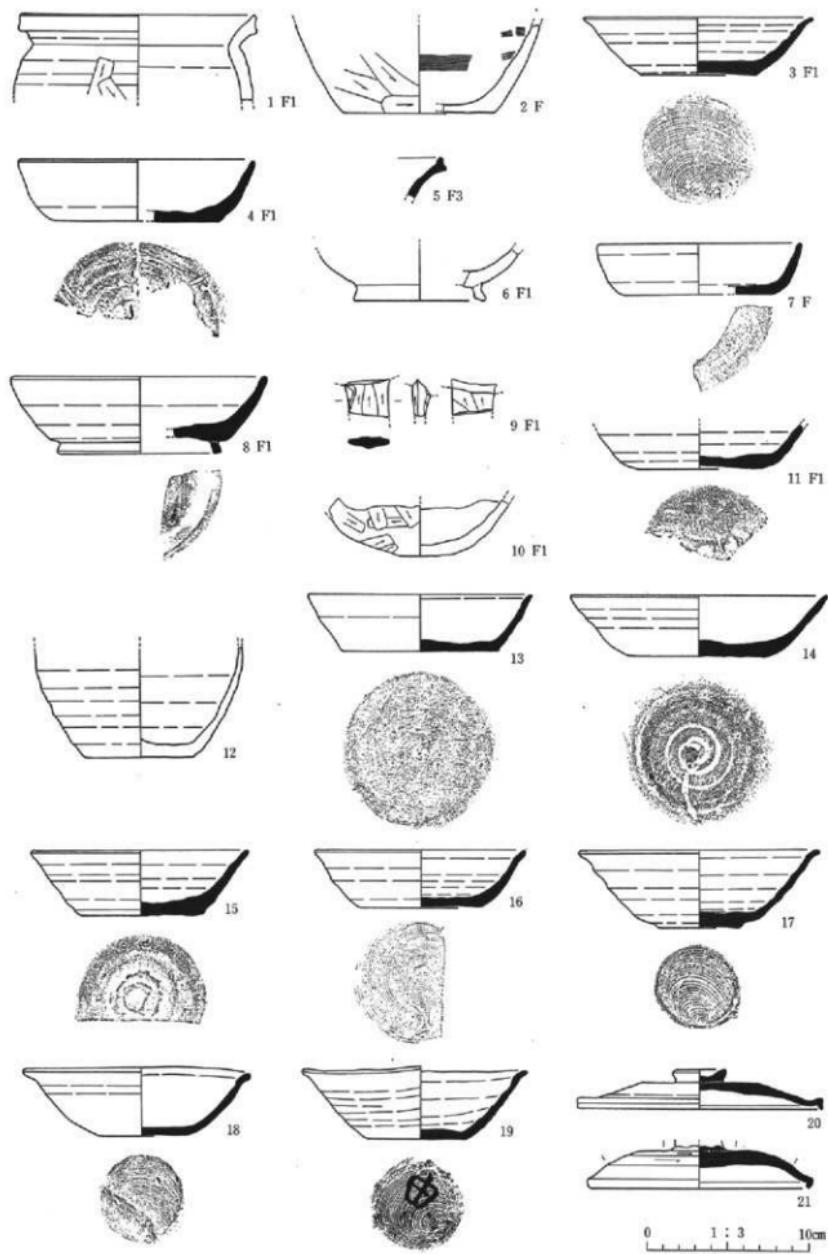
SX62（遺構・第3図）

A区M～N・28～29グリッドにかけて南北方向に軸を合わせるように東面・北面・西面を囲まれた東北7.5m、東西6.2mの方形の落ち込みである。底面に凹凸がある性格不明遺構である。

4、グリッド出土の遺物（第18図13～第19図18）

須恵器壺（第18図13～19）：13は回転ヘラ切りで、切り離し後ナデ調整を行っている。14・15も回転ヘラ切りで、底部調整をしていない。遺構出土の回転ヘラ切りの壺には似た形状のものはない。16～19は回転糸切りで、16は底径が大きく、17から19は底径が小さい。19は底部に墨書きがあり「由」と読み取れる。須恵器蓋（同図20～21）：20・21とも天井部にケズリを行っている。土師器高台付壺（第19図1）：回転糸切りで、付高台である。内面は化粧土とミガキで赤彩効果を出している。赤焼土器高台付壺（同図2）：高台と体部の接点を削り出し、体部がやや膨らみながら立ち上がり口端部がやや外反する。高台は高くない。赤焼土器鉢（同図3・4）：付高台の高い高台が付く。器厚から大振りであることが考えられる。3・4とも破片が小さく全体の器形が不明なので他の器種であることも考えられる。土師器壺（同図5）：器面の内外を丁寧に磨き、両面に黒色処理を施す。土師器碗（同図6・7）：6は口端から体部下部は横方向のミガキ、外面底部にケズリを行う。内面は口端から底部まで丁寧なミガキを行い、内外面とも黒色処理を施す。口端部外面は立ち上がり、シャープになる。胎土はST38出土の黒色土器（第7図10）と良く似る。同一個体の場合は、体部と柄の部分の接着面が見あたらないが柄付きの杓と考えられる。赤焼土器蓋（第19図8）：小破片で全体の器形がつかめない。糸切り痕があるので、糸切り痕がある面を底面とし、蓋に分類した。赤焼土器壺（同図9・10）：壺の口縁部を一括した。土師器壺（同図11・12）：11は器面の内外面にハケメ調整を施す小型の甕口縁である。12は底部に木葉痕があり、器面の内外面にハケメ調整を施す。赤焼土器壺（同図13）：口端が丸みを帯び、外面に縱方向のケズリを施す。須恵器横瓶（同図14・17）：14は閉塞部で、17は内面にロクロ目と青海波のアテ痕、外面にロクロ目とタタキ痕がある。土師器高壺（同図15）：内外面をナデ調整を行っている。須恵器壺（同図16）：短頸壺。胴部最大径が体部の上部にあり、体部下部の二ヶ所に沈線が巡る。飾り金具（同図18）：金銅製と考えられる。断面は台形をなし、正面（実測図左）には15条の細縫起線があり、間隔は不均一である。背面には装飾らしいものは見あたらない。





1~2 (SK5)、3 (SK18)、4~6 (SK25)、7(SX 3)、8~10(SK26)、11(SK36)、12(鉢跡B)、13~21(グリッド)

第18図 SK5・18・25・26・36・SX3・鉢跡B・グリッド出土遺物実測図

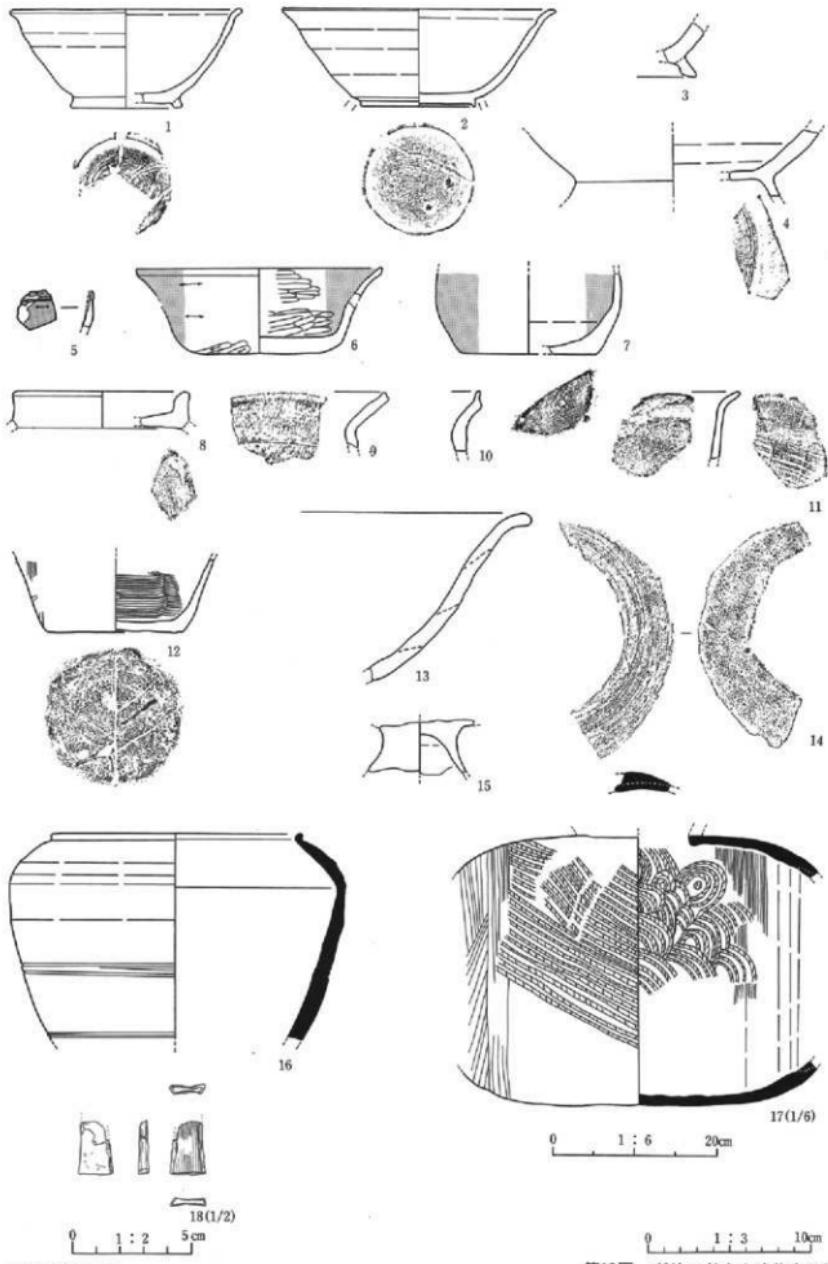


表-2 造構計測表 () 内の数値は残存値を示している。

遺構番号	検出地区	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	遺存状態	造構跡回	造構回版	遺物跡回	備考
SD1	C～F-20～22	900	180	35	良好	17	13		旧沢跡
SX3	N～O-33	130	(58)	15	不良	3	卷頭1	第18回7	一部調査区外
SK4	N～O-32	233	200	36	良好	16	12		
SK5	N～O-30	223	138	37	良好	16	10・12	第18回1～2	
SK6	N～O-30	188	99	25	不良	3	10		
SK9	M-29	132	96	51	良好	14	3・10・12	第15回10～13	覆土1層焼土
SK11	L～M-30	293	154	35	良好	14	3・10		焼石多数検出
SK13	N-32	141	110	27	不良	3	卷頭1		
SK14	M～N-31～32	270	118	39	良好	16	12		
SK15	M-32	186	108	15	不良	3	卷頭1		SK18と重複
SX16	M～N-32～33	262	(120)	8	不良	3	卷頭1		一部調査区外
SK17	L～M-32	253	148	26	不良	3	卷頭1		
SK18	M-32	136	80	17	不良	3	卷頭1	第18回3	SK15と重複
SK19	L～M-31	175	160	39	良好	3	10・12		中央覆石焼石検出
SX20	K～L-29～30	426	346	40	不良	4	3・4	第15回4～9	ST37・38を切っている
SK24	K-30	295	142	17	不良	3	4		
SK25	J～K-30	157	83	12	不良	3	4	第18回4～6	
SK26	J-30	230	212	—	不良	3	卷頭1	第18回8～10	
SK29	J～K-31	140	118	17	良好	16	12		
SK30	J～K-31	114	90	28	良好	16	12		焼壁土坑？
SP32	K-28	58	52	—	不良	3	卷頭1		
SD33	M-28	(128)	39	—	不良	3	卷頭1		試跡
SD34	M-28	(225)	61	—	不良	3	卷頭1		試跡
SD35	K～N-27～28	(1,615)	110	—	不良	3	卷頭1		
SK36	K-27	150	(45)	—	不良	3	卷頭1	第18回11	
試跡A	K～L-22～24	(203)～(530)	32～50	8～27	良好	17	卷頭1		主軸N-3° -W
試跡B	K～N-23～26	325～830	33～52	7～22	良好	17	12	第18回12	主軸N-78° -W
試跡C	L～N-26～28	(182)～798	34～52	—	不良	3	卷頭1		主軸N-60° -W
S X62	M～N-28～29	750	620	3～7	不良	3	卷頭1・10		底面凹凸あり

表一 3 造物觀察表(1)

探査番号	出土地点	層位	種別	器種 分類	計測値 (mm)			底部 切り離し	調査・成形			備考		
					口径	底径	高さ		外面	内面				
6-1	ST37	F2	須恵器	壺 I A			4	歛 口				圓錐形合		
2	ST37	F2	須恵器	壺 I A	(74)			歛 口						
3	ST37	Y	須恵器	壺 I G 4	39	(28)	5	歛 口	良	圓錐形切	口	圓錐形合		
4	ST37	(EP40)	須恵器	壺 I C 1	(25)	(16)	5	歛 口	良	口	口	圓錐形合		
5	ST37	F2	須恵器	壺 I C 4	(25)	(15)	5	歛 口	良	口	口	圓錐形合		
6	ST37	F2	須恵器	壺 I C 1	(47)	(20)	5	歛 口	良	口	口	圓錐形合		
7	ST37	F2	土師器	壺 II D 2	(90)	(63.5)		粗砂	やや良	ケ	リ	ナ デ ?		
8	ST37	F3	須恵器	壺 II D 1	(20)	(17)	4	歛 口	良	口	口	圓錐形合		
9	ST37	F2	須恵器	壺 II D 9			6	粗砂	良	口	口	圓錐形合		
10	ST37	F3	須恵器	壺 II D	70	(79)	7	粗砂	良	圓錐形切	口	口	圓錐形合	
11	ST37	(EL42)	須恵器	壺 II D	(42)	70	(112)	5	粗砂	良	口	口	圓錐形合, RP7	
12	ST37	Y	須恵器	壺 I H			8	歛 口	良	タ	キ	ア テ		
13	ST38	Y	須恵器	壺 I A	(52)	(54)	3.5	歛 口	良	圓錐形切	口	口	圓錐形合	
14	ST38	F3	須恵器	壺 I A	(46)	75	45	粗砂	やや良	口	口	圓錐形合		
15	ST38	F5	須恵器	壺 I A 3	(34)	(29)	5	歛 口	良	圓錐形切	口	口	ST12なら同一片出土	
16	ST38	F	須恵器	壺 I A	(76)	(29)	7	歛 口	良	口	口	圓錐形合		
17	ST38	F4	須恵器	壺 I D 1	(22)	(62)	5.5	粗砂	良	口	口	圓錐形合		
18	ST38	F4	須恵器	壺 I G 2			7	歛 口	良	ヨコナ	ヨコナ	圓錐形合		
19	ST38	F5	須恵器	壺 I C 1	148		37	歛 口	良	圓錐形切	口	口	圓錐形合	
20	ST38	F3	須恵器	壺 I C 1	148	(24)	5	歛 口	良	圓錐形切	口	口	圓錐形合	
21	ST38	Y	須恵器	壺 I C 1	139		36	6	歛 口	良	圓錐形切	口	圓錐形合, RP106	
22	ST38	Y	須恵器	壺 I C 1	135		32	5	歛 口	良	口	口	圓錐形合, RP106, 圓錐形合	
23	ST38	Y	須恵器	壺 I C 2	146		22	6	歛 口	良	圓錐形切	口	口	RP118
24	ST38	F5	須恵器	壺 I G 1	(130)	72	(89)	5.5	粗砂	やや良	口	口	圓錐形合	
7-1	ST38	(EP59)	土師器	壺 II D 5	(20)	(340)	6	歛 口	良	口	口	ハケメ	RP98, 圓錐形合	
2	ST38	(EP59)	土師器	壺 II D 5			6	粗砂	良	口	口	ハケメ	圓錐形合, 蘭葉合	
3	ST38	Y	須恵器	壺 II D 11	(30)		5	粗砂	やや良	口	口	口	圓錐形合, 蘭葉合	
4	ST38	F	須恵器	壺 II D			7	粗砂	やや良	口	口	口	圓錐形合, 蘭葉合	
5	ST38	F	須恵器	壺 II D 1	(83)		5	石美砂	良	口	口	口	蘭葉合	
6	ST38	Y	土師器	壺 II C 1	72		9	粗砂	良	ナ	メ	ミガメ	RP97, 黒色丸彌	
7	ST38	Y	土師器	壺 II D 7	(44)	(35)	7	粗砂	良	ハケメ	ハケメ	ミガメ	圓錐形合, 蘭葉合	
8	ST38	(EP50)	土師器	壺 II D			75	5.5	石美砂	やや良	ハケメ	(タテ)	RP98, 圓錐形合	
9	ST38	Y	須恵器	水 手	50	茎16 基21	241	4.5	歛 口	良	口	口	水ハコ乳, 授乳袋O-10開 RP78, 79, 81, 91	
10	ST38	Y	黒色土器	取 手	幅34	長129	厚21	歛 口	良	ケ	リ	ミガメ	圓錐形合, RP124 19-6と同一個体か	
11	ST38	Y	鉢	刀 子	幅35	長83	厚15						RM119	
12	ST38	Y	鉢	市	幅30	長49	厚10							
13	ST39	Y	須恵器	壺 I A			4	粗砂	良	口	口	口	圓錐形合	
14	ST39	F1	須恵器	壺 I A			3	歛 口	良	口	口	口	口音器が扭曲している	
15	ST39	Y	須恵器	壺 I A 5	144	62	39	5	歛 口	良	口	口	RP116	
16	ST39	Y	須恵器	壺 I A 5	136	54	42	4	粗砂	良	口	口	圓錐形合, RP73	
17	ST39	Y	須恵器	壺 I A 5	131	57	37	4	歛 口	良	口	口	圓錐形合, RP72	
18	ST39	Y	須恵器	壺 I A 2	142	56	42	4.5	粗砂	良	口	口	圓錐形合, 内面粗砂層有 RP70	
19	ST39	Y	須恵器	壺 I A 2	145	70	40	5.5	歛 口	良	口	口	圓錐形合, RP71	
8-1	ST39	(EL40)	須恵器	壺 I A 2	(46)	(68)	39	4.5	粗砂	やや良	口	口	圓錐形合	

表一 4 遺物観察表(2)

調査番号	出土 場所	層位	種別	分類	計測 値(mm)			地 質	成 形	調整・成形			備 考	
					口径	底径	高さ			外 面	内 面			
8-2 ST39	Y	須恵器	坪 I A 3	(H4)	62	34	5	織 窓	良	回転糸切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	内面底部擦痕有、RP117 須恵器、縫合骨針含	
3 ST39	Y	須恵器	坪 I A 2	(H4)	140	63	40.5	5	織 窓	やや良	回転糸切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	RP9
4 ST39	Y	須恵器	坪 I A 5	(H2)	58	35.5	5	細砂混	良	回転糸切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	内面底部赤色顔料付着、 縫合骨針含	
5 ST39	Y	須恵器	高台村坪 I B1	(H6)	78	47	4	織 窓	良	回転糸切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針含、RP115	
6 ST39 (EL40)	須恵器	坪 I E	(H4) (60)	53	4	織 窓	良	圓ヘタ切?	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針含			
7 ST39	F5	須恵器	坪 I C 3	(A4)	140	27	6	織 窓	良	回転糸切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	内面底部擦痕、海綿骨針含	
8 ST39	Y	須恵器	坪 I C 3	(A4)	146	31	5	織 窓	良	ケズリか ヘラナダ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	内面底部擦痕、RP85	
9 ST39 Y(土)	須恵器	坪 I C 3	(A4)	134	25	7	細砂混	良	回転糸切り	ロ ク ロ	津波有り	海綿骨針含、RP69		
10 ST39	Y	須恵器	坪 I C 3	(A4)	138	35	6	細砂混	良	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針含、取扱観、RP75		
11 ST39	Y	須恵器	坪 I C 3	(A4)	122	25	5	織 窓	良	回転糸切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針含、RP74	
12 ST39 Y(他土)	須恵器	坪 I C 4	(A4)	133	36	5	織 窓	良	ロ ク ロ	ケズリ	ロ ク ロ	内面底部擦痕、 海綿骨針含、ゆがみ、外 面端に擦痕有、内面底部 擦痕? RP80		
13 ST39	Y	須恵器	坪 I C 1	(A4)	133	6	細砂混	良	ロ ク ロ	ケズリ	ロ ク ロ	海綿骨針含		
14 ST39	Y	須恵器	坪 II D 2	(C6)	142	6	細砂混	良	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	雷母合、RP105		
15 ST39	Y	須恵器	坪 II D 9	(C5)	5	織 窓	良	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	雷母合、海綿骨針含			
16 ST39	F1	須恵器	坪 II D 4	(C6)	59	5	細砂混	良	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	雷母合、海綿骨針含		
17 ST39 (EL40)	須恵器	坪 II D 1	(C6)	73	6.5	織砂混	良	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	雷母合、海綿骨針含			
18 ST39	Y	須恵器	坪 II D 12	(C6)	65	59	4.5	細砂混	良	回転糸切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	雷母合、RP81	
19 ST39	Y	須恵器	坪 II D 2	(C6)	120	127	7	織 窓	良	ロ ク ロ	ハケメ?	ロ ク ロ	雷母合、海綿骨針含 RP86	
20 ST39	F1	須恵器	坪 II D 3	(C6)	160	60	7	細砂混	やや良	ロ ク ロ	ケズリ	ロ ク ロ	雷母合、海綿骨針含	
21 ST39	F1	土師器	坪 II D 1	(A4)	84	45	7	細砂混	良	ケズリ	ハケメ		底部形態が非常に不定 で直立しない。RP9	
22 ST43	Y	須恵器	坪 I A 6	(A4)	94	41	5	織 窓	やや良	回転ヘタ切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針合、丹丸火はね RP94	
23 ST43	Y	土師器	坪 II A 1	(A4)	68	57	4	細砂混	良	マメガの為 不規則	ロ ク ロ	ミガキ 黒色是	内面土師、雷母合、RP93	
9-1 ST43	Y	須恵器	坪 I A 2	(A4)	130	64	35	4	織 窓	良	回転糸切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針含、RP84
2 ST43	Y	須恵器	坪 I A 2	(A4)	73	39	4	融 合	良	回転糸切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	RP76	
3 ST43	Y	須恵器	坪 I A 5	(A4)	75	41	4	織 窓	やや良	回転糸切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	RP121	
4 ST43	Y	須恵器	坪 I A	(A4)	6	5	織 窓	良	回転糸切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ			
5 ST43 (EP50)	須恵器	坪 I A	(A4)	66	(5.9)	7	細砂混	やや良	回転糸切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針含		
6 ST43	Y	須恵器	坪 II D 2	(C6)	55	6	細砂混	良	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針・雷母合		
7 ST43 (EL49)	須恵器	坪 II D 1	(C6)	69	6	E毛 粗 砂 混	やや良	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針・雷母合			
8 ST43	Y	土師器	坪 II D 3	(C6)	87	8	織 窓	良	ロ ク ロ	ケズリ	ハケメ	ST40F-ST37F など破 片出土。海綿骨針含		
9 ST43	F	須恵器	坪 II D 10	(C6)	74	5	細砂混	やや良	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	雷母合		
10 ST43 (EL49)	須恵器	坪 III E	(C6)	83.5	0.9	織 窓	良	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針合、外側に被熱 のため赤色付着			
11 ST43 (EL49)	須恵器	坪 III G	(C6)	41.5	10	粗砂混	やや良	ケズリ チヂミ	チヂミアフ	チヂミアフ	チヂミアフ	海綿骨針合		
12 ST43	F2	須恵器	坪 I A 6	(A4)	90	45	5	細砂混	不良	回転糸切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針合	
13 ST43	F1	須恵器	坪 I A 6	(A4)	89	40.5	6	織 窓	良	ヘタ切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針合	
14 ST43	F1	須恵器	坪 I A 4	(A4)	55	45	4	粗砂混	良	回転糸切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	体溝中央 に火はね	
15 ST43	F1	須恵器	坪 I A	(A4)	66	20	5	織 窓	良	回転糸切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針合	
16 ST43	F1	須恵器	坪 I A 7	(A4)	50	45	5	織 窓	不良	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針合	
10-1 ST43	F2	須恵器	坪 I A	(A4)	85	15	5	粗砂混	不良	回転ヘタ切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針合	
2 ST43	F2	須恵器	坪 I A	(A4)	74	5	織 窓	良	回転ヘタ切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針合		
3 ST43 (EP47)	須恵器	高台村坪 I B5	(C6)	37	4.5	細砂混	やや良	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針合			
4 ST43	F3	須恵器	坪 I A		4	粗砂混	良	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針合			
5 ST43	Y	須恵器	坪 I A	(A4)	74	25	4	織 窓	良	回転ヘタ切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	海綿骨針合	
6 ST43	Y	須恵器	坪 I D 3	(A4)	25	5.5	5	織 窓	不良	回転糸切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ		

表一五 遺物觀察表(3)

編號 番号	出土 地点	附位	種別	器種 分類	計 量 値 (mm)		底成	調査・成形			備考				
					口径	底径	器高	厚唇	胎土	外画	内画				
10-7	ST40	Y	須恵器	碗 I D 3	(70)	5	致 密	良	回転余切り	ロク	ロク				
8	ST40	Y	須恵器	碗 I D 2	(36)	5	致 密	良	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針合			
9	ST40	F2	須恵器	壺 I G 4	78 (45)	4.5	致 密	良	回転ヘラ切り	ロク	ロク	ロク	付高台		
10	ST40	F1	須恵器	壺 I G 4	57 (32)	3.5	致 密	良	回転ヘラ切り	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針合・付高台		
11	ST40	F1	須恵器	蓋 I C 5	(38)	(34)	5	致 密	良	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針合・内側擦痕有		
12	ST40	F2	須恵器	蓋 I C 6	(61)	(20)	5	細砂膜	良	ロク	ロク	ロク			
13	ST40	Y	須恵器	蓋 I C 6	136	50	21	4	致 密	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	RP163
14	ST40	F1	須恵器	壺 I H 1	(82)	(32)	10	致 密	やや良	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針合		
15	ST40	F1	須恵器	壺 I G	(49)	5	致 密	良	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針合・印がみ有			
16	ST40	Y	須恵器	壺 I G 3	(38)	粗砂膜 (26)	(49)	6	細砂膜	良	ロク	ロク	ロク	耳の幅分火はね・ケズリ有り	
17	ST40	F1	須恵器	壺 III D	74	(71)	8	細砂膜	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	蓋得合	
18	ST40	(E140)	須恵器	壺 III D	140	74	135	4.5	細砂膜	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	RP120
19	ST40	F1	須恵器	壺 III D 7	(25)	6	致 密	良	ロク	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針・蓋得合		
20	ST40	Y	須恵器	壺 III D 11	105	50	62	4	細砂膜	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針・蓋得合 RP90
21	ST40	F1	須恵器	壺 III D 5	(190)	(76)	5	細砂膜	良	ロク	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針・蓋得合	
22	ST40	Y	須恵器	壺 III D 6	(56)	6	粗砂膜	良	ロク	ロク	ロク	ロク			
23	ST40	F2	土師器	壺 II D 1	(78)	(33)	6	細砂膜	良	ケズリ	ナゲ、ハナツ	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針・蓋得合
24	ST40	F1	土師器	壺 II D 2	(83)	(13)	11	細砂膜	やや良	ケズリ	ナゲ、ハナツ	ロク	ロク	ロク	底部本輪有
25	ST40	F1	土師器	壺 II D 2	(90)	(14)	7	細砂膜	良	ケズリ	ナゲ、ハナツ	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針合
H-1	ST40	Y	土師器	壺 II D 1	25	5	細砂膜	良	ケズリ	ナゲメ?	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針合・底部不規則	
2	ST10	F1	須恵器	壺 I A 5	140	60	33	4	致 密	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	内側底部に赤色頸輪付有、馬蹄骨針合
3	ST10	F1	須恵器	壺 I A 5	(130)	53	40	4	致 密	良	ロク	ロク	ロク		
4	ST10	F1	須恵器	壺 I A 1	138	65	32	4'	細砂膜	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針合・RP29
5	ST10	F	須恵器	壺 I A	(72)	(28)	5	致 密	良	ロク	ロク	ロク	内側底部に赤色頸輪付有		
6	ST10	F1	須恵器	壺 I B 2	(130)	66	56	5.5	粗砂膜	やや良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針合・RP2
7	ST10	Y	須恵器	壺 I H 3	(660)	(37)	9	致 密	良	ケズリ、ナゲ	ケズリ、ナゲ	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針合
8	ST10	F2	須恵器	錐 I F 1	(228)	(150)	5	致 密	良	ロク	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針合・RP96	
9	ST10	F1	吉備土器	壺 III D	(140)	74	(106)	6	細砂膜	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	表面全体がマツツしている
10	ST10	Y (縦)	吉備土器	壺 III D	(140)	(65)	4	細砂膜	やや良	ロク	ロク	ロク	ロク	蓋得・馬蹄骨針合・RP30	
11	ST12	F2	須恵器	壺 I A 5	130	50	42	3	致 密	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	RP27
12	ST12	F1	須恵器	壺 I A 5	142	52	48	40	致 密	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	RP23
13	ST12	F3	須恵器	壺 I A 5	130	52	41	3	致 密	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針合・RP22
14	ST12	F2	須恵器	壺 I A 5	146	58	44	5	致 密	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針合・RP23
15	ST12	F2	須恵器	壺 I A 7	(130)	(46)	37	3.5	致 密	不良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	RP34
12-1	ST12	F3	須恵器	壺 I A 5	140	56	45	4	致 密	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	RP26・37
2	ST12	F2	須恵器	壺 I A 5	140	60	49	4	致 密	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	純然不規のため全体黄褐色を呈する。RP2
3	ST12	F1	須恵器	壺 I A 2	144	58	45	4	致 密	やや良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	純然不規のため底部付近赤褐色を呈する。RP19・40
4	ST12	F2	須恵器	壺 I A 5	144	58	43	5	致 密	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針合・RP19・26・40
5	ST12	F2	須恵器	壺 I A 5	135	49	39	3	致 密	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	RP28
6	ST12	F2	須恵器	壺 I A 5	142	56	43	3	致 密	やや良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	RP26
7	ST12	F1	須恵器	壺 I A 2	(140)	(60)	(50)	5	致 密	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	内側基部の付着物有り RP21・39
8	ST12	F2	須恵器	壺 I A 5	(129)	(54)	44	3	致 密	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	RP34・41
9	ST12	F2	須恵器	壺 I A 5	146	54	42	4	致 密	やや良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	馬蹄骨針合・RP34
10	ST12	F2	須恵器	壺 I A 5	136	56	40	3	致 密	良	回転余切り	ロク	ロク	ロク	口沿部はロクロ回転時に「?」形で曲げている。RP33・41

表一 6 遺物觀察表(4)

標識番号	出土 地点	層位	種類	分類	計測 値 (mm)			地 質	燒 成	底 部	調整・成形			備 考					
					口径	底径	高さ				外 面	内 面							
12-11	ST12	F1	須恵器	坪 I A 5	140	58	45.5	4	緻 密	不良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	KP19・49				
12	ST12	Y	須恵器	坪 I A 1	140	58	(40)	4	緻 密	良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	RP25・35				
13	ST12	Y	須恵器	坪 I A 2	142	(76)	37	5	緻 密	良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	内面底部赤色顔料付着				
14	ST12	Y	須恵器	坪 I A 5	136	56	48.5	4	緻 密	良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	墨書き「由」、RP28・49				
15	ST12	Y	須恵器	坪 I A 2	138	52	45	5	緻 密	良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	RP4・39				
16	ST12	Y	須恵器	高台村坪 I B3	153	74	55	3	緻 密	良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	海綿骨針含、RP83				
17	ST12	Y	須恵器	高台村坪 I B3	152	71	60	4	緻 密	良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	海綿骨針含、RP20・41				
18	ST12	F1	須恵器	高台村坪 I B3	138	(50)	55	3.5	緻 密	やや良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	海綿骨針含、RP25				
13-1	ST12	F3	須恵器	高台村坪 I B3	136	68	53	5	緻 密	良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	海綿骨針含、RP20・36				
2	ST12	F2	須恵器	高台村坪 I B3	145	66	56	4	緻 密	良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	海綿骨針含、RP28				
3	ST12	F1	須恵器	高台村坪 I B3	160	79	56	4	細砂渦	やや良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	海綿骨針含、RP21				
4	ST12	Y	土師器	坪 II A 3	160	39	65	4	緻 密	良	圓軸系切り 後ナメ調理	ア	ズ	リ	ロ	ク	ロ		
5	ST12	F1	土師器	坪 II A 2	145	68	(7.2)	4	緻 密	良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	ロナギナガ 内面黒色処理。RP24				
6	ST12	Y	土師器	高台村坪 II B1	136	62	(50)	4	細砂渦	良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	ミガキ 内面黒色処理、海綿骨針含、ケズリガラフ、RP33				
7	ST12	Y	須恵器	塗 I C 7				4.5	緻 密	良	ロ	ク	ロ	海綿骨針含					
8	ST12	F1	土師器	高台村坪 II B1	62	14	8	緻 密	良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	内面黒色処理、つまみ出し有り					
9	ST12	F3	須恵器	坪 I F 2	180	(96)	10	緻 密	良	圓軸系切り ナメナゲ調理	ア	タ	リ	ロナギナガ 付高台、RP32					
10	ST12	F2	須恵器	坪 II A 2	180	(50)	26	7	細砂渦	不良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	付合、RP22				
11	ST12	F2	須恵器	塗 I H 4	120	(62)	6.5	細砂渦	やや良	不明	ロ	ク	ロ	海綿骨針含					
12	ST12	Y	赤陶土器	塗 III D	122	66	(42)	5	細砂渦	良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	骨母含				
13	ST12	Y	赤陶土器	塗 III D 1				6	細砂渦	やや良	ロ	ク	ロ	海綿骨針、骨母含					
14	ST12	Y	赤陶土器	塗 III G 2				8	細砂渦	良	ロ	ク	ロ	海綿骨針、骨母含					
15	ST12	F2	粘土塊			36	31	22							破壊して施き回った粘土塊、RP22				
16	ST12	Y	赤陶土器	塗 III G 3				6.5	細砂渦	やや良	ロ	ク	ロ	海綿骨針、骨母含					
17	ST12	Y	赤陶土器	塗 III G 1	120			9	細砂渦	良	ロ	ク	ロ	海綿骨針、骨母含					
18-1	ST61	(SL63)	須恵器	塗 I C 3	130			29	6	緻 密	良	不明	ロ	ク	ロ	RP123			
2	ST61	(SL63)	土師器	塗 II D 5				7	細砂渦	やや良	ロ	ク	ロ	ロ	ク	ロ	露合、RP105		
3	ST61	(SL63)	土師器	塗 II D 5	124	(39.9)	6.5	細砂渦	やや良	ケズリ	ハナダ	海綿骨針、骨母含							
4	SX20	F1	須恵器	坪 I A 1	144	(44)	(31)	5	緻 密	良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	ロ	ケズリ	RP46		
5	SX20	F1	須恵器	坪 I A 1	137	62	36	5	細砂渦	良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	ロ	ケズリ	海綿骨針含、RP48		
6	SX20	F1	須恵器	坪 I A	50			5.5	細砂渦	やや良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	ロ	ケズリ	海綿骨針含、墨書き?		
7	SX20	F1	須恵器	塗 I C		(20)	6	細砂渦	良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	ロ	ケズリ	海綿骨針含、内面転用器			
8	SX20	F1	須恵器	塗 I H 2	190	(160)	8	緻 密	良	平打タト	ア	テ	ロ	ク	ロ	海綿骨針含、RP42、6-12 と同一個体か			
9	SX20	F1	赤陶土器	塗 III D			7	緻 密	やや良	ロ	ク	ロ	ロ	ク	ロ	海綿骨針、骨母含、RP45			
10	SK9	Y	須恵器	坪 I F 2	130	130	124	4.5	緻 密	良	ロ	ク	ロ	ク	ケズリ	海綿骨針含、ST12F1・ ST10F1からも鏡片出土、 RP27・67			
11	SK9	Y	須恵器	塗 I H 3	130	(36)	10	緻 密	良	タ	キ	ヘナダ							
12	SK9	F1	須恵器	坪 I A 5	130	57	47	5	細砂渦	やや良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	ロ	ケズリ	海綿骨針含、内面にスヌ 森の付着物有、RP65		
13	SK9	Y	赤陶土器	塗 III A 1	130	(48)	(4)	緻 密	良	ロ	ク	ロ	ロ	ク	ロ	ロ	露合、海綿骨針含、RP52		
18-1	SK5	F1	赤陶土器	塗 III D 7	142	80	8	細砂渦	良	ロ	ク	ロ	ク	ロ	ケズリ	ロ	ク	ロ	露合、海綿骨針含、RP5
2	SK5	F	土師器	塗 II D 2	142	(52)	64.9	8	細砂渦	良	ケズリ	ハケメ	海綿骨針、骨母含						
3	SK18	F1	須恵器	坪 I A 10	140	70	36	5	細砂渦	良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	ロ	ケズリ	内面底部有、RP5		
4	SK25	F1	須恵器	坪 I A 6	140	(90)	38	5	細砂渦	やや良	圓軸系切り	ロ	ク	ロ	ロ	ケズリ	海綿骨針含、RP60		
5	SK25	F3	須恵器	塗 I H				3	緻 密	良	ロ	ク	ロ	ロ	ケズリ				
6	SK25	F1	赤陶土器	塗 III F	130	(90)	(32)	8	細砂渦	良					付高台				

表一 7 遺物觀察表(5)

標題番号	出土地点	層位	種別	器種 分類	計測値 (mm)			鉢	底部	調整・成形			備考	
					口径	底径	器高			外	内	面		
16-7	SX3	F	須恵器	壺 I A 6	(134)	(92)	32	5	破 壊	良	回転ヘタ切り	ロ	クロ	ロ
8	SK26	F1	須恵器	高台付壺 I B4	(156)	(106)	48	7	細砂混	良	ナガ調整のため不規	ロ	クロ	ロ
9	SK26	F1	須恵器	豆耳壺 I J	(25)	13	7	破 密	良	ケズリ	ケズリ			海綿骨針合 RP59
10	SK26	F1	土師器	壺 II D 3		(37)	7	粗砂混	中や良	ケズリ	ナ	デ		付高台、海綿骨針合 RP57
11	SK26	F1	須恵器	壺 I A	(130)	(78)	26	5	破 密	良	回転ヘタ切り	ロ	クロ	ロ
12	L29	帆路B	赤陶土器	壺 III D	(136)	67	(68)	5	破 密	中や良	回転系切り	ロ	クロ	ロ
13	M-33		須恵器	壺 I A 8	(136)	95	35	4	細砂混	良	回転ヘタ切り	ロ	クロ	ロ
14	K-27		須恵器	壺 I A 9	(155)	89	38	4	細砂混	やや良	回転ヘタ切り	ロ	クロ	ロ
15	K-27		須恵器	壺 I A 2	(134)	78	46.5	5	破 密	やや良	回転ヘタ切り	ロ	クロ	ロ
16	J-27		須恵器	壺 I A 10	(120)	(74)	35	4	細砂混	良	回転系切り	ロ	クロ	ロ
17	K-L-29		須恵器	壺 I A 4	(140)	51	47.5	4	細砂混	良	回転系切り	ロ	クロ	ロ
18	L-29		須恵器	壺 I A 5	(140)	52	42	5	破 密	良	回転系切り	ロ	クロ	ロ
19	K-29		須恵器	壺 I A 10	(136.5)	58	45	4	破 密	良	回転系切り	ロ	クロ	墨書き「由」
20	J-32		須恵器	壺 I C 2	(150)	24	5	破 密	良	回転系切り	ロ	クロ	ロ	
21	L-29		須恵器	壺 I C 1	(134)	(26)	7	破 密	良	ロ	タ	ロ	クロ	内側擦痕有、海綿骨針合
19-1	M-32		土師器	高台付壺 II B2	(144)	(76)	(61)	4	破 密	良	回転系切り	ロ	クロ	ロ
2	K-L-29		赤陶土器	高台付壺 III B	(165)	70	60	5	細砂混	やや良	回転系切り	ロ	クロ	ロ
3	J-29		赤陶土器	壺 III F	(162)	(31.9)	6	破 密	具	ロ	タ	ロ	クロ	海綿骨針合
4	L-25		赤陶土器	壺 III F	(122)	(40)	9	細砂混	良	回転系切り	ロ	クロ	ロ	
5	K-27		土師器	壺 II A 4		4.5	破 密	良		ミガキ	ミガキ			両面黒色處理、RP16
6	J-30		土師器	壺 II C 3	(150)	(80)	(52)	6	破 密	良	ミガキ	ミガキ	ミガキ	内・外面黒色處理、海綿骨針合 RP16
7	L-24		土師器	壺 II C 2	(82)	(50)	7	破 密	具	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	内・外面黒色處理、海綿骨針合
8	J-30~31		赤陶土器	壺 III C	(168)	(97)	23	8.5	細砂混	やや良	回転系切り	ロ	クロ	ロ
9	N-29		赤陶土器	壺 III D 8		7	細砂混	良		ロ	タ	ロ	ハケメ	墨書き・海綿骨針合
10	J-29		赤陶土器	壺 III D 1		(37)	6	破 密	良	ロ	タ	ロ	クロ	海綿骨針合
11	J-30		土師器	壺 III D 4		(40)	5	細砂混	やや良	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	墨書き
12	K-29		土師器	壺 II D 2		84	(46)	5	粗砂混	良	ハケメ	ハケメ	ハケメ	底部木葉痕有り、蓋付・海綿骨針合
13	M-N-29		赤陶土器	壺 II G 4		(130)	9.5	石英砂混	良	ロ	タ	ロ	ロ	墨書き、RP56
14	J-30, K-29		須恵器	横蓋壺 丸く深 II 11				粗砂混	良					火はね育、RP100
15	L-27		土師器	高壺 II E	明様 44	(33)	4	粗砂混	やや良	ナ	ダ	ナ	ダ	墨書き・海綿骨針合、RP17
16	J-29, K-30		須恵器	壺 I G 2	(150)	(120)	(17.9)	9	破 密	良	ロ	タ	ロ	ハケメ
17	N-33		須恵器	鋼瓶 I I	(300)		(220)	10	粗砂混	良	ロ	タ	タ	ロ
18	L-28		金銀製品	銅金具?	(21)	15	3							金銅製?(刀子用?)

IV 調査のまとめ

1、遺跡の立地と遺構について

遺跡が山間地の谷底にあり、今までの知見にあるような沖積地の微高地に立地することが多かった奈良・平安時代の遺跡の立地と異なる。また、発掘所見からも明らかのように、たびたび地滑りや崩壊に遭うなど、居住するには不適な所にあるといえるが、8棟もの堅穴住居跡が存在し、規模が一辺が2.2mから大きいものでも3.6mと、全般的に見るとやや小振りであるものの特徴である。また、住居跡の切り合いは、ST38を基準に見た場合にST38→ST37→SX20、ST38→SX20→ST61→ST39、ST38→ST43→ST61→ST39、ST38→ST43→ST40→ST39という4ヶ所の切り合いが認められる。これを遺構の切り合いと遺物の接合関係から整理すると、古い順にST38→ST43→ST40→ST37→SX20→ST61→ST39となると思われる。ST12は他の遺構との切り合い関係はないが、出土した遺物からST39に後続すると考えられる。

2、遺物と遺構の時期について

もっとも多く出土した遺物は須恵器で、次いで赤焼土器となり土師器がもっとも少ない。特に須恵器は多種多様な器種が出土したが、赤焼土器は煮沸形態に器種が偏る（煮沸形態の壺、高台付壺は極端に少ない）など、種別と器種によるばらつきがある。

今回出土した土器の胎土と種別と器形の関係を述べると、すべての種別と器種に共通しているのは海綿骨針である。赤焼土器・土師器の壺や壺などの大型品には雲母や粗砂が見られるが、須恵器の壺や壺などの大型品には粗砂はやや含むことはあるものの、雲母は含まない。小型品に関しても、赤焼土器や土師器は雲母を含むことはあるが、須恵器は細砂を含むことはあっても雲母を含むことはない。このことは、胎土のベースとなる粘土は須恵器・赤焼土器・土師器とも共通の粘土を用いていることが考えられる。そして須恵器・土師器・赤焼土器の種別（焼成方法の違い）と器種によって混和剤（雲母・粗砂・細砂など）を選択していることが考えられる。

土器の分類については、須恵器をI、土師器をII、赤焼土器をIIIとし、底部の切り離しは回転ヘラ切りをa、回転糸切りをbとした。それぞれの種別と器種については表-8～9の土器分類表と、第20図の土器分類図にまとめてある。また表-10には各遺構ごとの土器組成表をまとめてある。

須恵器壺の内面底部に赤色顔料が付着しているものが見受けられ、これらの外面には赤色顔料が付着していないことを考えると壺を赤色顔料の容器に転用したと考えられる。須恵器壺以外で赤色顔料が付着したものは出土していない。また、須恵器の壺や蓋の内面に擦り痕が認められるものも比較的多く出土した。内訳は、ST37蓋1・ST38蓋1壺1・ST39蓋3壺2・ST40蓋1・SX20蓋1で合計10点である。

明らかな移入品として、ST38出土の縄投糞座の原始灰釉陶器（第7図9）がある。原始灰釉陶器に関しては須恵器の範疇でとらえる考え方が多いが、本稿では焼成中の燃料の灰が器面に付着して釉化する現象を意図的に利用して製作したものとしてとらえた。

表一8 土器分類表(1)

注)切り離しで、aは回転ヘラ切りを示し、bは回転糸切りを示す。また底部形態や切り離し等のは推定を示す。

土器区分	器種	分類(種別)	ロクロ用	口 築 壁 ~ 体 部 形 態	外 围 調 整	内 围 調 整	底部形態	切り離し
須 恵 環	1	便 用		体部がやや外反し、器高が高い。	ロクロ	ロクロ	平底	a b
	2	便 用		体部がほぼ直線に立ち上がる。	ロクロ	ロクロ	平底	a b
	3	便 用		体部が外開きし、器高が低い。	ロクロ	ロクロ	平底	b
	4	便 用		体部が円柱状に立ち上げる形態がほぼ直線で、口縁が外反する。	ロクロ	ロクロ	平底	b
	5	便 用		体部がやや内凹し、口縁が外反する。	ロクロ	ロクロ	平底	b
	6	便 用		体部と体部の境が丸みを帯び、体部の側面やかに立ち上がる。	ロクロ	ロクロ	平底	a b
	7	便 用		体部が内凹しながら立ち上がる。	ロクロ	ロクロ	平底	b
	8	便 用		底部と体部の境が角を有り、体部が直線に立ち上がる。	ロクロ	ロクロ	平底	a b
	9	便 用		底部と体部の境が丸みを帯び、体部の側面やかに立ち上がる。	ロクロ	ロクロ	平底	a
	10	便 用		体部が直線に立ち上がり、口縁が外反し、器高が低い。	ロクロ	ロクロ	平底	b
高 台 村 环 B	1	便 用		体部がやや内凹しながら立ち上がる。	ロクロ	ロクロ	付高台	b
	2	便 用		体部が直線で立ち上がり、器高が高い。	ロクロ	ロクロ	付高台	b
	3	便 用		体部が縦やかに立ち上がり、口縫が外反する。	ロクロ	ロクロ	付高台	b
	4	便 用		体部が内凹し、底縫が広い。	ロクロ	ロクロ	付高台	b
	5	便 用		体部が直線に立ち上がり、口縫が広い。	ロクロ	ロクロ	付高台	a
蓋	1	便 用		天井がほぼ平らで、口縫端が直立か内反する。	ロクロ	ロクロ		aが多い
	2	便 用		天井と体部の境が角をなし、口縫部がくぼんで口縫端部が直立。	ケズリ、ナダ ロクロ	ロクロ		a?
	3	便 用		天井と体部の境が不明瞭で、口縫端部を折り曲げる。	ロクロ	ロクロ		b
	4	便 用		天井と体部の境が不明瞭で、口縫端部が角をなし内傾する。	ロクロ ケズリ ロクロ	ロクロ		b?
	5	便 用		天井部が平らなく、口縫端部が内傾する。	ロクロ ケズリ ロクロ	ロクロ		b?
	6	便 用		つまみが無く、口縫端部が内反する。ケズリ等は無い。	ロクロ ロクロ	ロクロ		b
	7	便 用		口縫端部が丸みを帯びる。	ロクロ	ロクロ		
碗	1	便 用		身が丸く、口縫がやや外反する。	ロクロ	ロクロ	不明	不明
	2	便 用		身が丸く、体部が内凹する。	ロクロ	ロクロ	不明	不明
	3	便 用		底縫。体部が内凹しながら立ち上がる。	ロクロ	ロクロ	中や上位	b
椎 楠	(E)	便 用		体部に横をを持つ。	ロクロ	ロクロ	付高台	a?
	1	便 用		口縫端が直線で、丸みを持つ体部で、ケズリを施す。	ロクロ、ケズリ ロクロ	ロクロ	不明	不明
鉢	F	便 用		体部が内凹しながら立ち上がり、口縫が外反する。	ケズリ ロクロ ナダ	ロクロ	付高台	aの後ナ デ調整?
	1	便 用		最火候が体部上にあり、口縫が小さいもの。	ロクロ	ロクロ	平底	b
	2	便 用		最火候が体部上にあり、口縫が大きいもの。	ロクロ	ロクロ	不明	不明
	3	便 用		球胴形の体部で耳を持つ。	沈窓	ロクロ	不明	不明
G	4	便 用		耳を複数つて、大小がある。	ロクロ、ケズリ	ロクロ	高台	a b
	1	便 用		口縫端が外側に引き、口縫端部が外傾する。	ロクロ	ロクロ	丸底?	
蓋	2	便 用		口縫部が直立し、口縫端部がリンゴ状の膨らみを持つ。	タタキ	タタキ	丸底?	
	3	便 用		底縫。体部が直線に立ち上がる。	ロクロ、タタキ ロクロ、タタキ	ロクロ?	平底	压痕
	4	便 用		底縫。体部が丸みを帯びて立ち上がる。	ロクロ?	ナダ ロクロ?、タタキ	平底	压痕
縦瓶	(I)	便 用		底縫を一括した。	タタキ	タタキ	アテ底	
	K006 (J)	便 用		双耳環を一括した。	耳の外ケズリ			
土 部 環 II	1	便 用?		底縫と体部の境が丸みを帯び、体部もやや丸みを帯びて立ち上がる。	底縫で不明	ミガキ 墨色処理	平底	不明
	2	便 用		底縫と体部の境が角をなして立ち上がる。	ロクロ、上半 にナダ?	ミガキ、黑色 透明	平底	b
	3	便 用		底縫の立ち上がり部分にケズリがあり、擬似高台となる。	ロクロ、下部 回輪ケズリ ミガキ	ミガキ、黑色 透明?	平底	bの後にナ デ調整?
	4	便 用		全体の器形は不明。	丸窓	ミガキ、黑色 透明	不明	不明
高 台 村 环 B	1	便 用		底縫と体部の境をつまむか削かして低い高台を得つもの。高台の 部分がはっきり分かるものと分からないものがある。	ロクロ	ロクロ	切り出し 高台	b
	2	便 用		底縫が縦やかに内凹して口縫がやや外反する。	ロクロ	ロクロ ミガキ	付高台	b
縦 C	1	不使用?		体部が縦やかに立ち上がる。		ミガキ、 墨色 処理	平底	压痕
	2	便 用?		体部が内凹しながら立ち上がる。		ミガキ、 墨色 処理	平底	bの後ナ デ調整?
	3	不使用		体部が外反しながら立ち上がり、口縫が面をなして直立するもの。 (他器種も考えられる)		ミガキ、 墨色 処理	丸底平底	ケズリ?

表一 9 土器分類表(2)

土器区分	種類	分類 (備註)	ロクロ 使用	口縫部～体部形態	外画調査	内面調査	底面形態	切り離し
土器	I	手裏7	底部中央が凸になり直立困難なもの。	ケズリ	ハケメ	丸底	ケズリ	
	2	不使用	平底で、体部がほぼ直線に立ち上がる。	ケズリ	ハケメ	平底	底底	
	3	不使用	丸底で直立困難なもの。	ケズリ	ナデ	丸底	ケズリ	
	4	不使用	体部と口縫部の境が屈曲するもの。	ハケメ	ハケメ			
	5	便用	体部が両曲し、体部と口縫の境が屈曲するもの。	ケズリ	ハケメ			
II	高环(E)		高環を一括した。		ナデ	黒色処理の痕跡有り。		
	环(A)	1 便用	体部が直線状に立ち上がるものの。	ロクロ	ロクロ	平底?	b?	
赤燒土器	A	2 便用	小窓で高底がなく底盤が広く、体部と口縫の境が屈曲するもの。	ロクロ	ロクロ	平底	b	
	高台付环(B)	便用	体部がやや内傾し、口縫がやや外反するもの。稍り出しによる低い高台を持つ。	ロクロ	ロクロ	割り出し	b	
	环(C)	便用	直と見えられるものを一括した。					b
III	要	1 便用	体部と口縫の境が粗糲し、口縫が圓を持つのもの。	ロクロ	ロクロ	平底?		
	2 便用	体部と口縫の境が粗糲し、口縫と口縫の境に後や沈線の区間があるものの。	ロクロ	ロクロ	平底?			
	3 便用	体部と口縫の境が直角に曲がり、口縫が直立するもの。	ロクロ	ロクロ	平底?			
	4 便用	体部と口縫の境が直立し、体部と口縫の境が青曲して口縫が画面をなし、直立するものの。	ケズリ	ロクロ	平底?			
	5 後用	体部と口縫の境が不明瞭で、口縫がやや外反するもの。	ロクロ	ロクロ	平底?			
	6 後用	体部と口縫の境が緩やかに屈曲し、口縫が外傾して口縫下端が出っ張るものの。	ロクロ	ロクロ	平底?			
	7 便用	体部と口縫の境が屈曲しに屈が外傾し、窓高が厚い。	ロクロ	ロクロ	平底?			
	8 便用	体部と口縫の境が屈曲し、口縫は窓を持つが上面がつまみ上がりらしいもの。	ロクロ	ロクロ	平底?			
	9 便用	体部と口縫の境が屈曲し、口縫がつまみ上るもの。	ロクロ	ロクロ	平底?			
	10 便用	体部と口縫の境が緩やかに屈曲し、口縫がやや外傾するもの。	ロクロ	ロクロ	平底?			
	11 便用	体部と口縫の境が屈曲し、口縫が丸みを持つもの。口縫の割に窓高が低い。	ロクロ	ロクロ	平底	b		
	12 便用	体部と口縫の境が屈曲し、口縫が外反して口縫が内湾すると考えられるものの。	ロクロ	ロクロ	平底	b		
重(E)	便用	瓶を一括した。	ロクロ	ロクロ、ナデ				
	F便用	高台付环よりも高い高台に持つもの。	ロクロ	ロクロ	付高台	b		
漆	1 便用	体部と口縫の境が緩やかに屈曲し、口縫が外傾するもの。	ロクロ	ロクロ				
	2 便用	体部と口縫の境が明瞭でなく、口縫が外傾するもの。	ロクロ	ロクロ				
	3 便用	丸みを帯びた口縫が外傾にあるまるもの。	ロクロ	ロクロ	丸底?			
	4 便用	体部と口縫の境が無く、口縫が外反する。	ロクロ	ケズリ	丸底?			

第7図9の水瓶は猿投窯編年の「折戸—10窯式」のもので、実年代に関しては生産地と消費地とでは開きがあるが、8世紀第4四半期から西暦800年前後としてとらえておきたい。また、寺院や官衙と考えにくい遺跡からの出土であり、猿投窯の製品の中で、地方に移出されたものの中では古い段階のものであり、分布としては北限にあたると思われる。

グリッドからの出土であるが金銅製と考えられる飾り金具(第19図18)も出土している。帰属する詳しい年代は不明だが、遺物自体は古代の範疇でとらえて良いものと考えられる。

各遺構出土遺物の年代に関しては、岩見・能登谷・船木の編年(1988)に当てはめると、ST38は西暦800年前後(原始灰陶陶器を根拠とする)～9世紀第1四半期と考えられる。須恵器环はほとんどが回転ヘラ切りで一部回転糸切りを含む。体部は直線かやや外反し底径が大きい。蓋は天井部が平らで口縫が直立し、切り離しは回転ヘラ切りが多い。ST43は9世紀第2四半期と考えられる。須恵器环の器形はS-T38に似るが、底部切り離しは回転糸切りになる。ST39は9世紀第4四半期と考えられる。須恵器环の底部切り離しは全て回転糸切りになり、底径・器高が小さくなり口径が大きくなる。体部は内湾気味に立ち上がる。口縫が外反傾向にあるが、一部は丸みを帯びるものがある。体部に歪みがあるものが出てくる。蓋はナデ肩状の体部になりになり、口縫が折り曲がる。切り離しは糸切りになる。ST12の須恵器环・高台付环の一群は9世紀末～10世紀初頭と考えられる。ST39の須恵器环

表-10 各遺擲土器組成表

注1)板状の資料の出土点と層位は遺構ごとの項目に示した。ST38・39の覆土は、覆土下層と床面直上出土の資料点数である。ST12出土
遺物は一部遺物と考えらるが、床面と覆土に分けて示した。

注2) 敷石は出土した個体の点数で、()の数字は、破片のため全

よりも底径が小さく、体部が内湾気味に立ち上がり口端が外反する傾向が強まる。高台付壺も体部が内湾気味に立ち上がり、口端が外反傾向にある。内面を黒色処理した大型の土師器壺が伴うと考えられる。

3. 誤謬の性格について

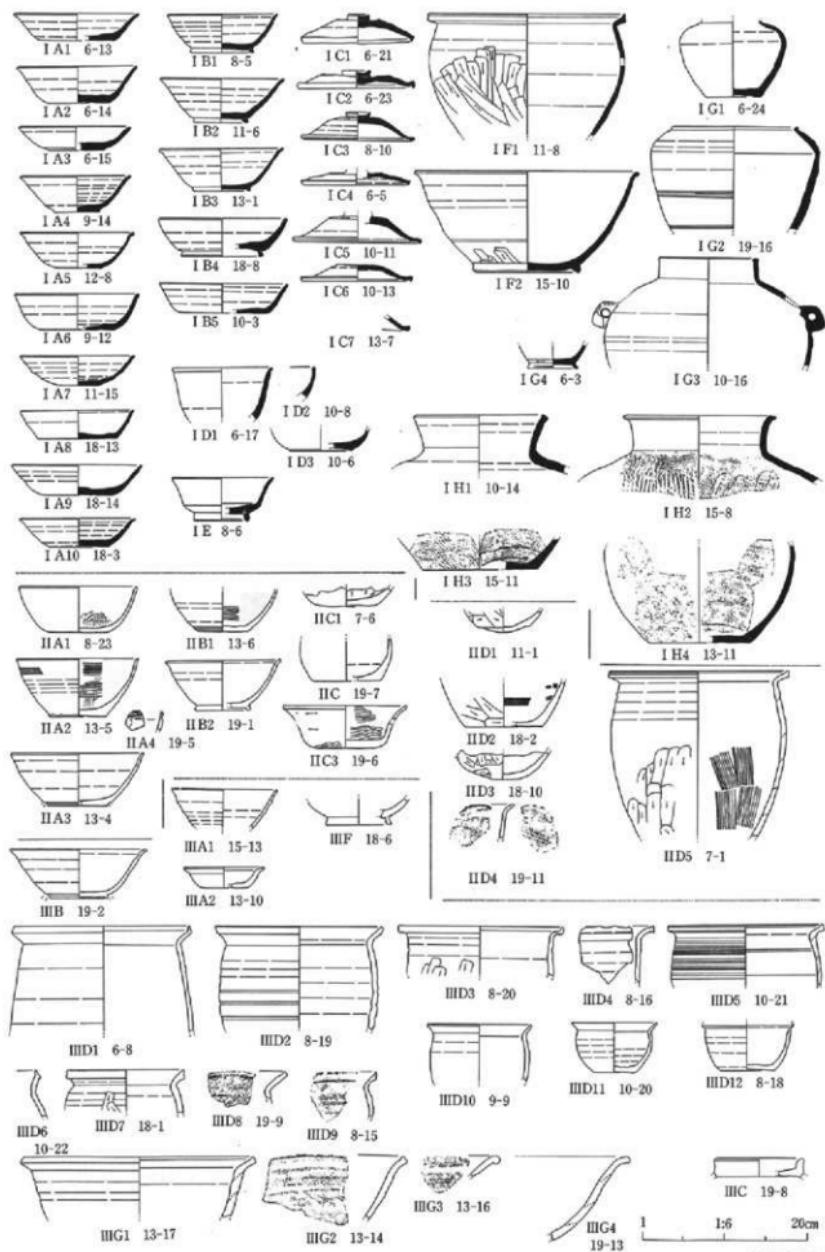
遺跡が山間の谷間の地滑りが起きやすい所に立地することから、農村集落とは考えにくい。周囲に登り窓を築くのに適した斜面があることや、ST38からロクロビット(EP49)と考えられる遺構の存在を考えると、近くに登窓の存在も考えられる。

奈良時代から平安時代にかけての大須恵器生産窯である平野山古窯跡群にも近いことから、須恵器工人に関係のある遺跡と考えられ、しかも飾り金具や、猿投産の原始灰陶陶器が出土していることから官衙と密接に結びついていたと考えられる。また本遺跡の約1.2km南東に位置する木ノ沢櫛跡からも9世紀代の小規模な竪穴住居4棟が確認されており、時期的には富山2遺跡と併行か接続した時期と考えられる。

富山2遺跡・平野山古窯跡群（あるいは末発見の須恵器窯）のそれぞれの遺跡は、須恵器生産を媒体として須恵器の成形段・須恵器の焼成といった機能を各々分担し、密接に関連して存在していたということが言えるだろう。

〈参考文献〉

- 佐藤庄一他「山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書」山形県教育委員会1979
佐藤庄一他「熊野台遺跡発掘調査報告書」山形県教育委員会1980
手塚 孝他「笠原遺跡発掘調査報告書」まんぎり会・米沢市教育委員会1981
斎藤孝正編「愛知県古窯跡群分布調査報告書（III）」愛知県教育委員会1983
渋谷孝雄「境田C・D遺跡発掘調査報告書」山形県教育委員会1984
長橋 至「不動木遺跡発掘調査報告書」山形県教育委員会1986
佐藤正俊・渋谷孝雄「達磨寺遺跡発掘調査報告書」山形県教育委員会1986
岩見誠夫・能登谷宣康・船木義勝「山形県の須恵器及び須恵器窯の編年」
山形考古第4巻第2号 山形考古学会1988
坂井秀弥他「新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀II遺跡」新潟県教育委員会1989
手塚孝・菊池政信「大浦 大浦B遺跡発掘調査報告書」米沢市教育委員会1993
山田邦和編「平安京出土土器の研究」（財）古代學協會・古代學研究会1994
古代の土器研究会編「古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3施釉陶器一」
古代の土器研究会1994
「木ノ沢櫛跡調査説明資料」財団法人山形県埋蔵文化財センター1996



土器分類図

報告書抄録

ふりがな	山形県に1996年9月30日付で提出された富山2遺跡発掘調査報告書							
書名	富山2遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第41集							
編集者名	鈴木良仁・須賀井明子							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL0236-72-5301							
発行年月日	西暦1996年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 度登録	東經 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
富山2	山形県 寒河江市 大字谷沢 字富山	6206	平成7年 度登録	38度 23分 15秒	140度 13分 18秒	19950717～ 19950812	1,300	東北横断自動車道酒田線(寒河江～西川間) 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
富山2	集落跡	奈良時代			須恵器(坏)			
		平安時代	竪穴住居跡 土坑 畝跡	8棟 16基 3群	須恵器(坏・壺・高台付 壺・壺・原始灰 釉陶器水瓶) 土師器(坏・壺他) 赤焼土器(坏・高台付 壺・壺・壠他) 金属製品(鉄製刀子・金 銅製飾り金 具) 木製品(櫛)	丘陵谷間の小さな平 坦地に立地し、8棟 の竪穴住居跡を検出 した。ロクロビット を持つ住居跡がある ことや、住居跡がや や小振りなことを考 えると特異な遺跡で あるといえる。また 猿投窓産の折戸10窓 式の原始灰釉陶器 (水瓶)が出土した。		

図 版



富山2遺跡遠景(南から)



富山2遺跡近景(南西から)



調査前状況(東から)



鉛入式風景(西から)



重機作業風景(西から)



粗掘作業風景(南から)



実測作業風景(西から)



遺構精査作業風景(南から)



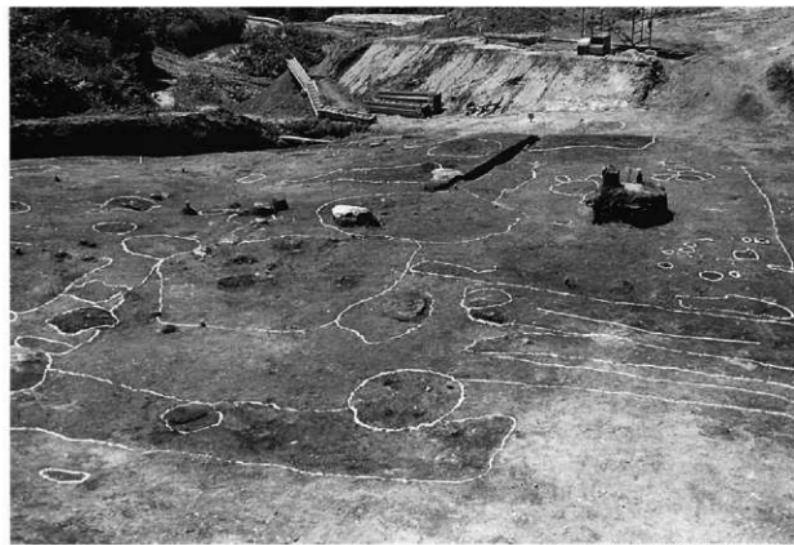
空中写真撮影風景(西から)



現地調査説明会風景(西から)



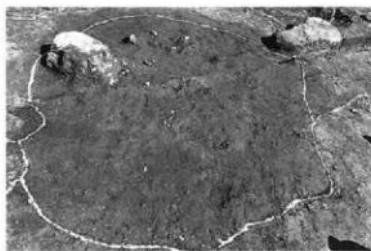
遺跡基本層序(南から)



A区東半部遺構確認状況(北から)



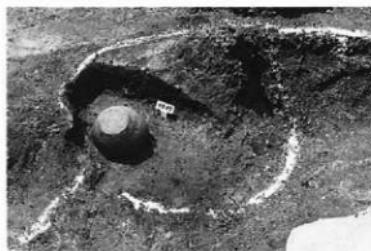
ST37~40・43住居跡空中写真(手前が南東)



SX20性格不明造構プラン検出状況(北から)



ST37住居跡 プラン検出状況(南から)



ST37 EL42カマド跡RP87(6-11)出土状況
(東から)



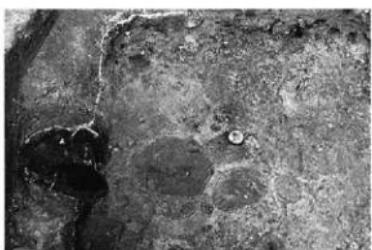
ST37住居跡完掘状況(南から)



ST38住居跡炭化材出土状況(北西から)



ST38 RP79・91・92(7-9)出土状況(南から)



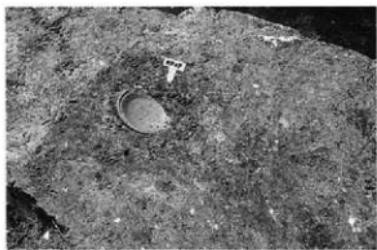
ST38住居跡柱穴検出状況(西から)



ST38 EP49口クロピット完掘状況, RP124(7-10)
出土状況(西から)



ST38住居跡完掘状況(北西から)



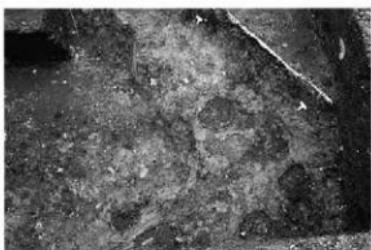
ST39住居跡床面焼土RP69(8-9)出土状況(東から)



ST39 EL41カマド跡土層断面(西から)



ST39住居跡床面RP115(8-5)上・116(7-15)下
出土状況(南から)



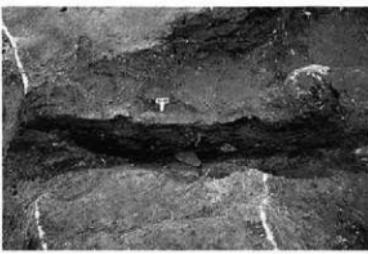
ST39住居跡柱穴検出状況(北西から)



ST39住居跡全景(西から)



ST43・39遺物出土状況(北から)



ST43 EL45カマド跡土層断面(東から)



ST43住居跡確認状況(東から)



ST43 EP5土層と遺物出土状況(南西から)



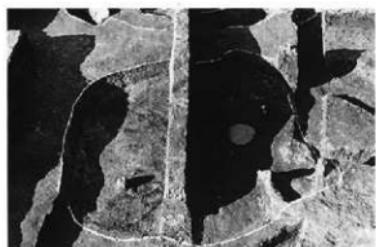
ST43住居跡完掘状況(東から)



ST37～39・43竪穴住居跡重複状況(東から)



EL41(ST39)・EL53(ST61)カマド跡重複状況(南から)



ST40 住居跡焼土検出状況(南西から)



ST40 EL46カマド跡RP120(10-18)出土状況
(北東から)



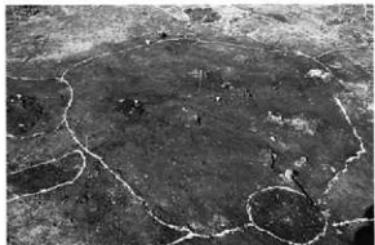
ST40 EK47土層断面と炭化材(南西から)



ST40 EL46カマド跡土層断面(東から)



ST40 住居跡柱穴検出状況(南西から)



ST10住居跡検出状況(西から)



ST10住居跡南側土層断面(北西から)



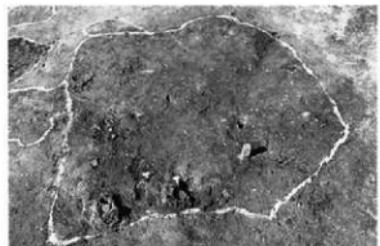
ST10住居跡完掘状況(北から)



ST10住居跡西側土層断面(南西から)



ST10・12住居跡完掘状況(手前が南西)



ST12住居跡検出状況(南から)



ST12住居跡土層断面(西から)



ST12住居跡発掘状況(手前が南)



ST12住居跡発掘状況(西から)



ST12住居跡遺物出土状況(南から)



SK4土坑土層断面(北から)



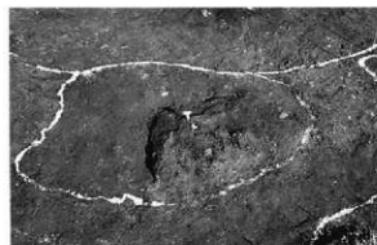
SK5土坑土層断面(北西から)



SK14土坑土層断面(西から)



SK30(左)・29(右)土坑半截状況(南西から)



SK9土坑検出状況(北西から)



SK19土坑完掘状況(西から)



跡跡検出状況(東から)



跡跡土層断面(北西から)

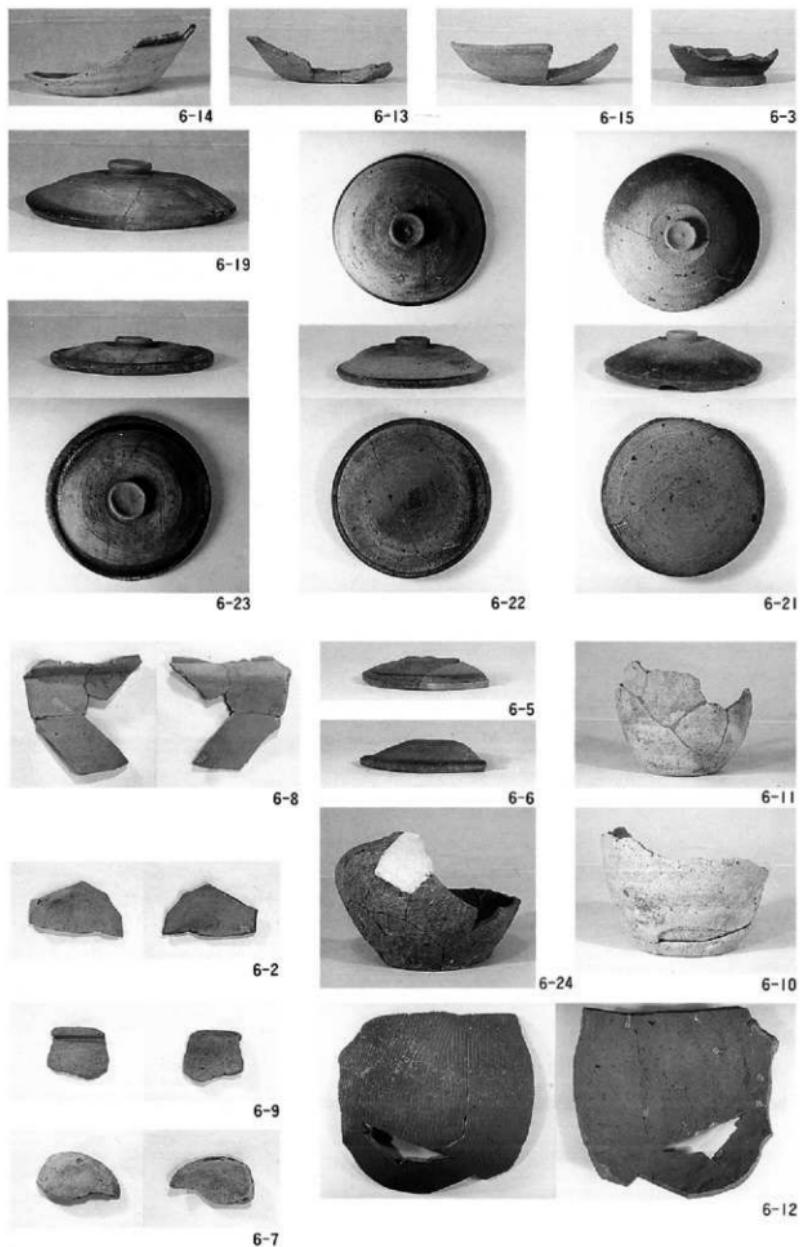


B区SDI溝跡全景(東から)

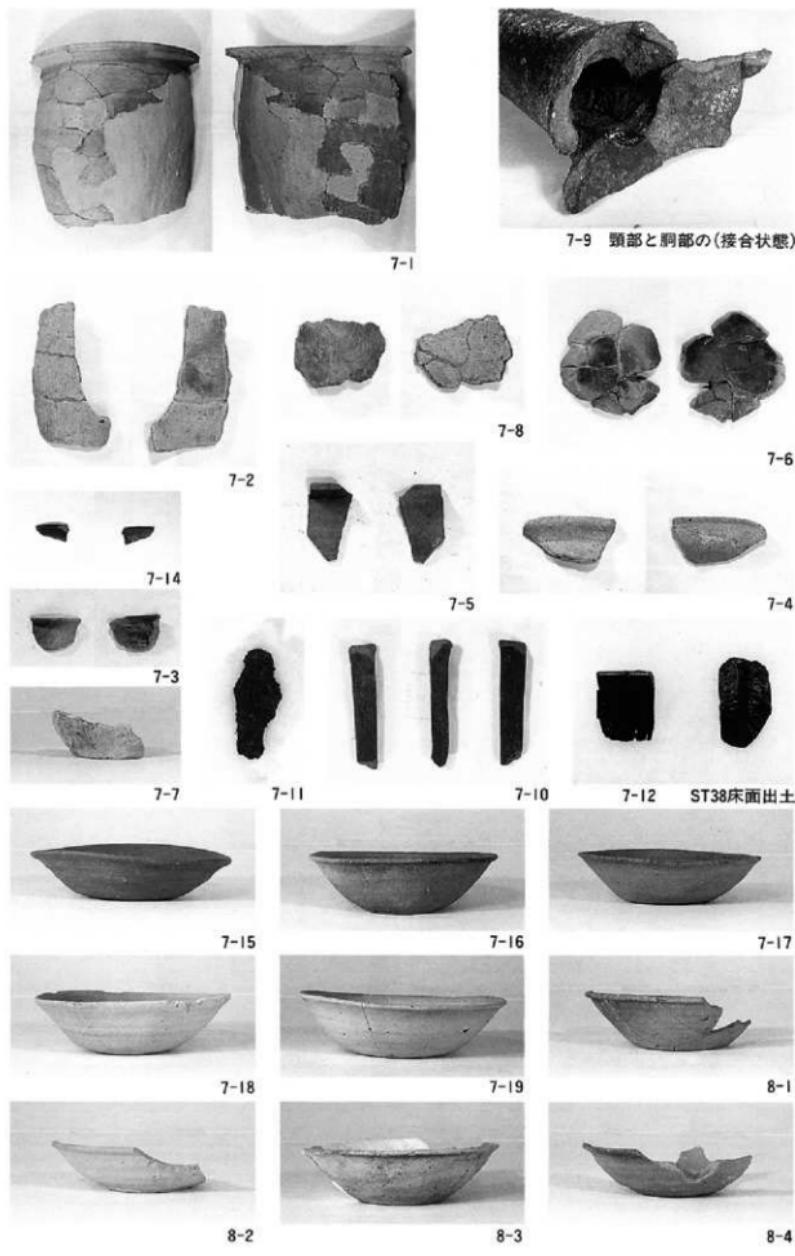


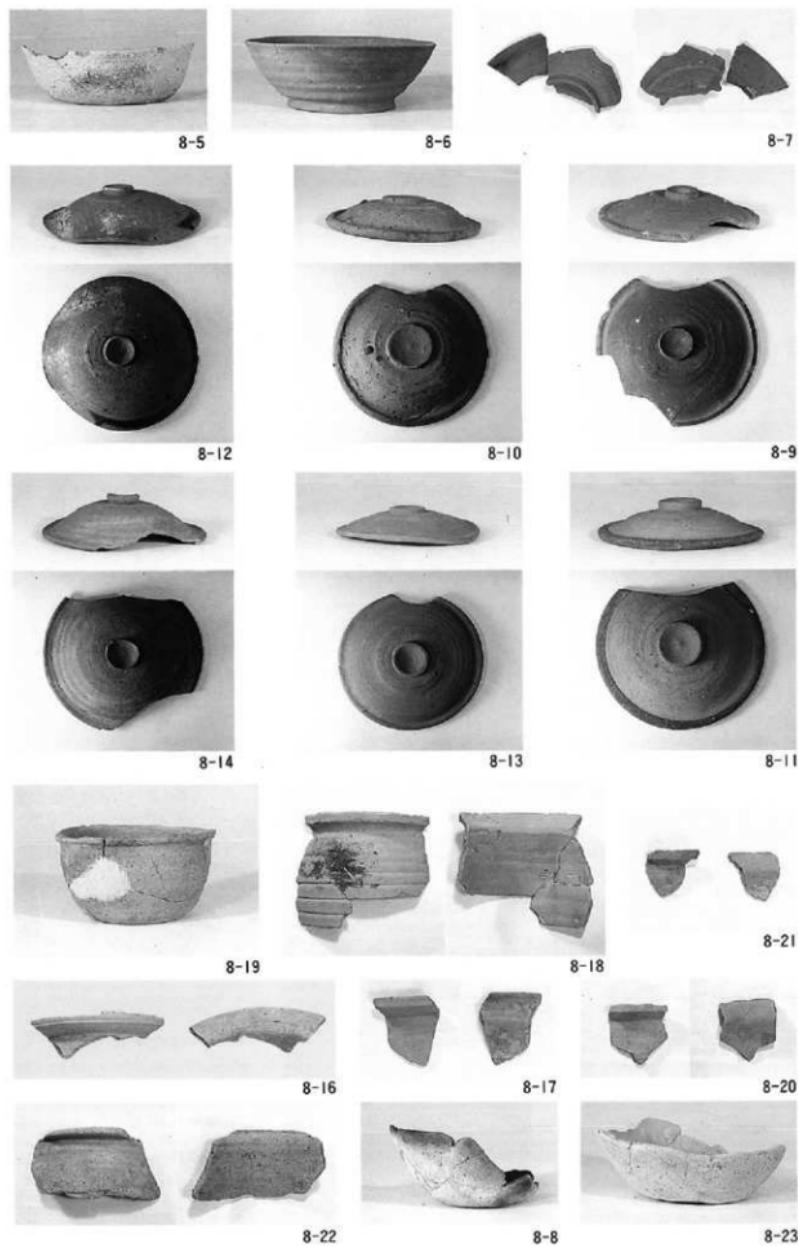
SDI溝跡土層断面(南から)

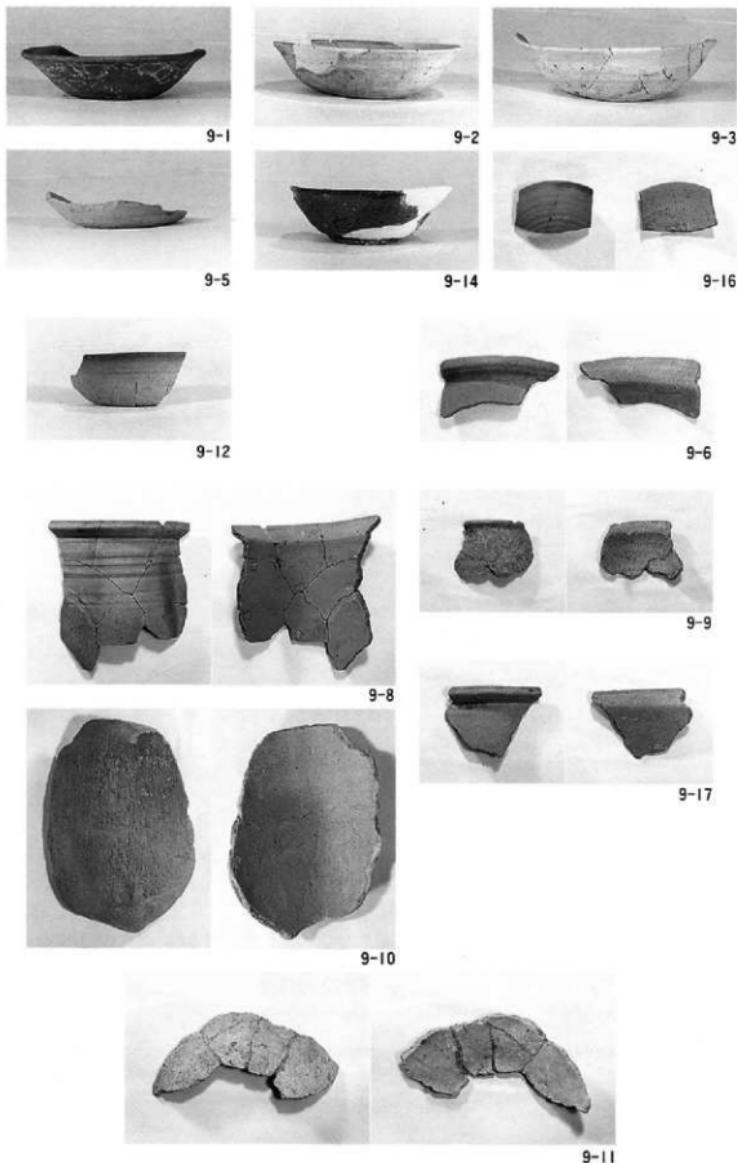
图版14

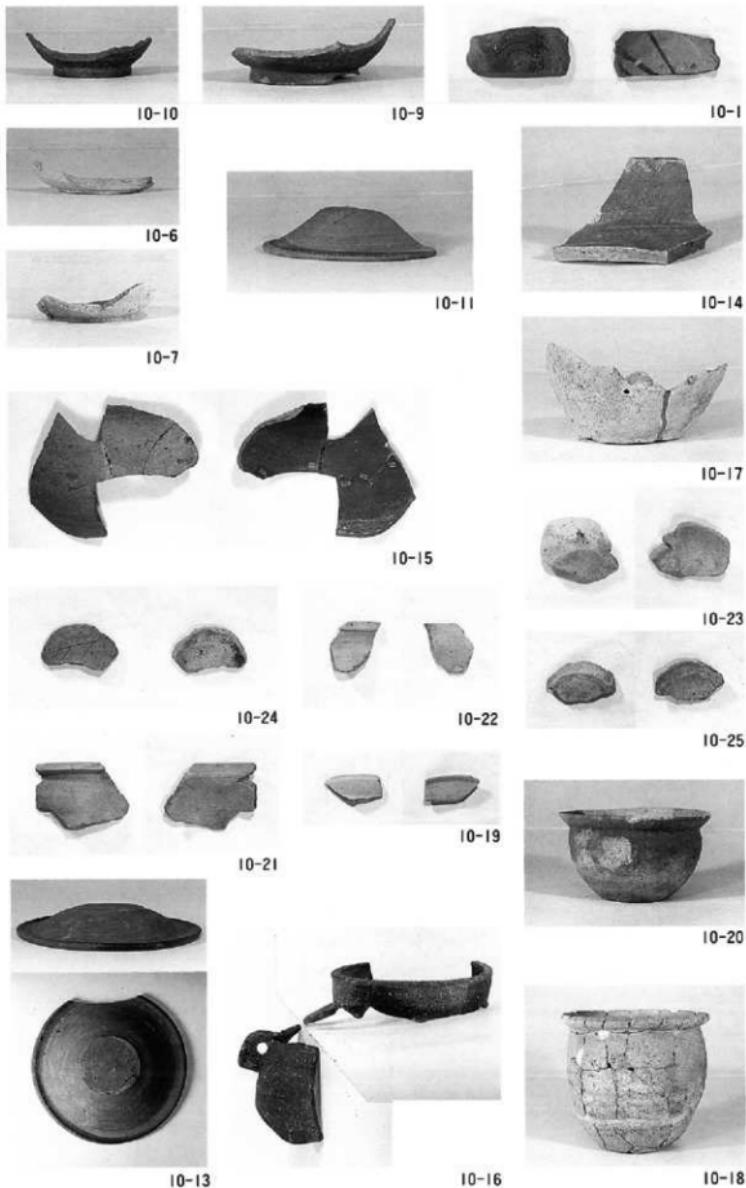


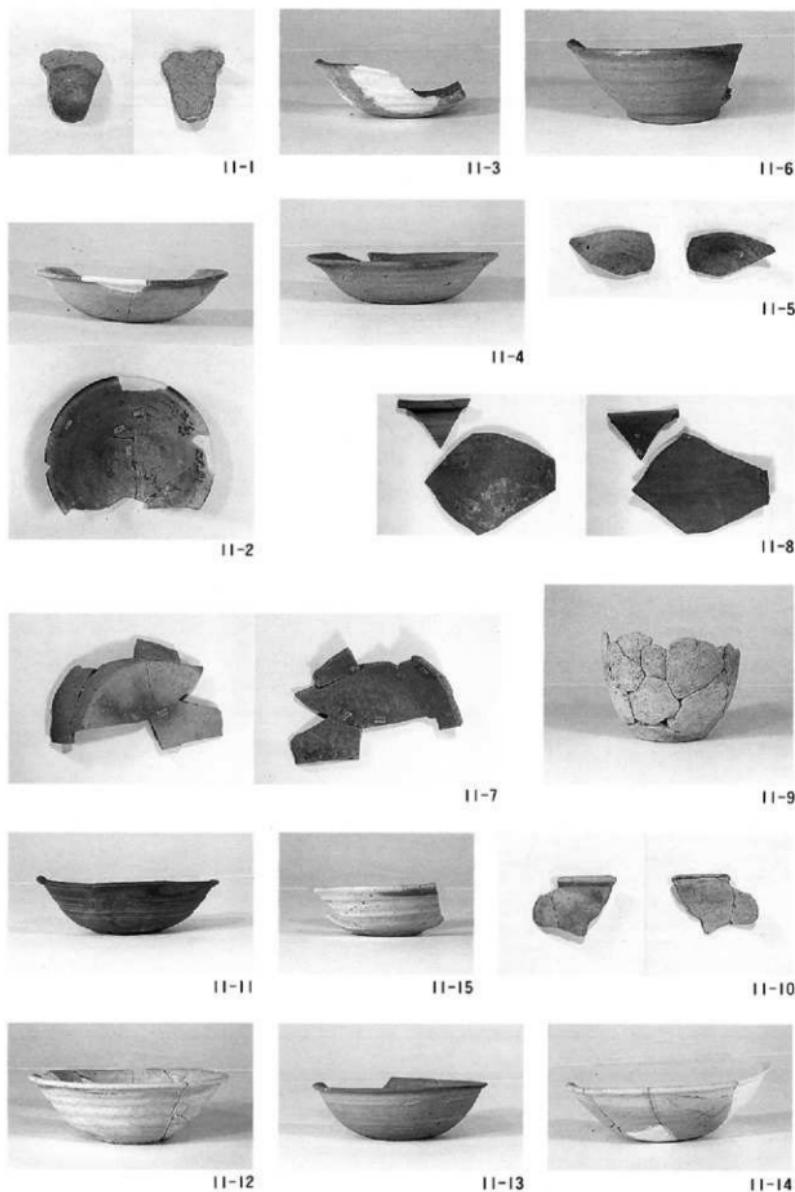
出土遺物(1)

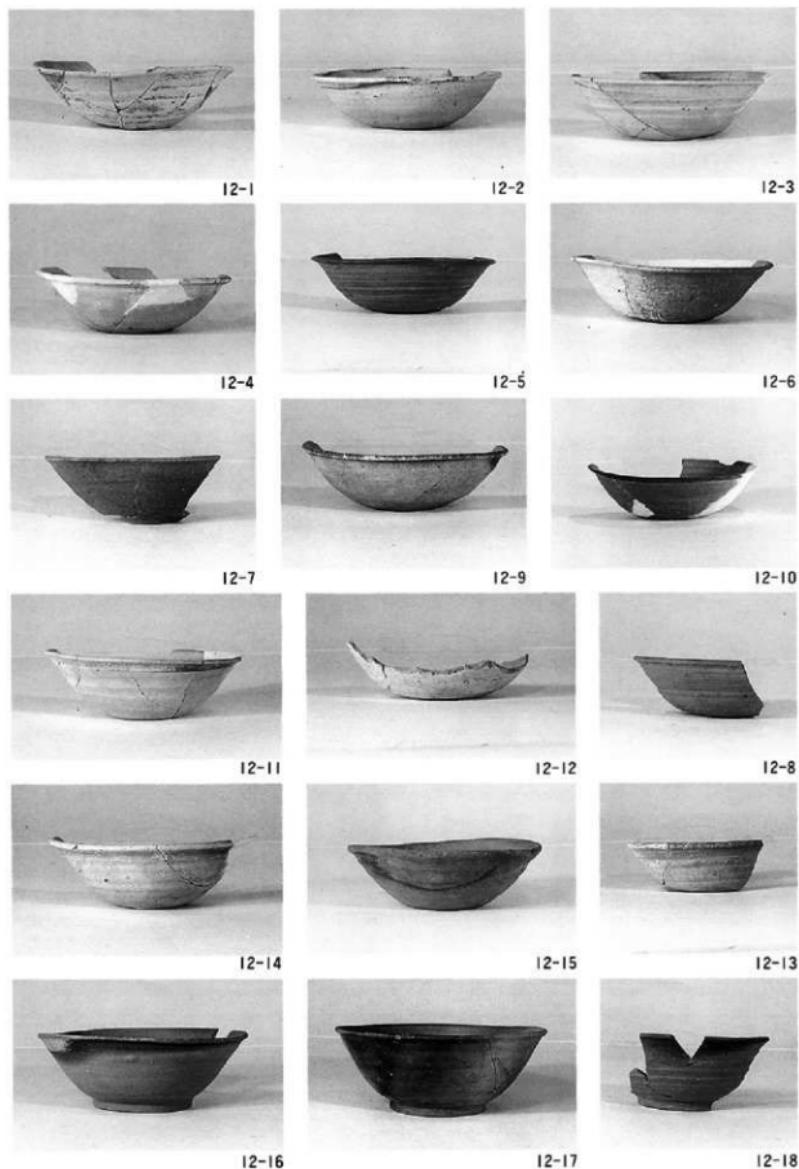


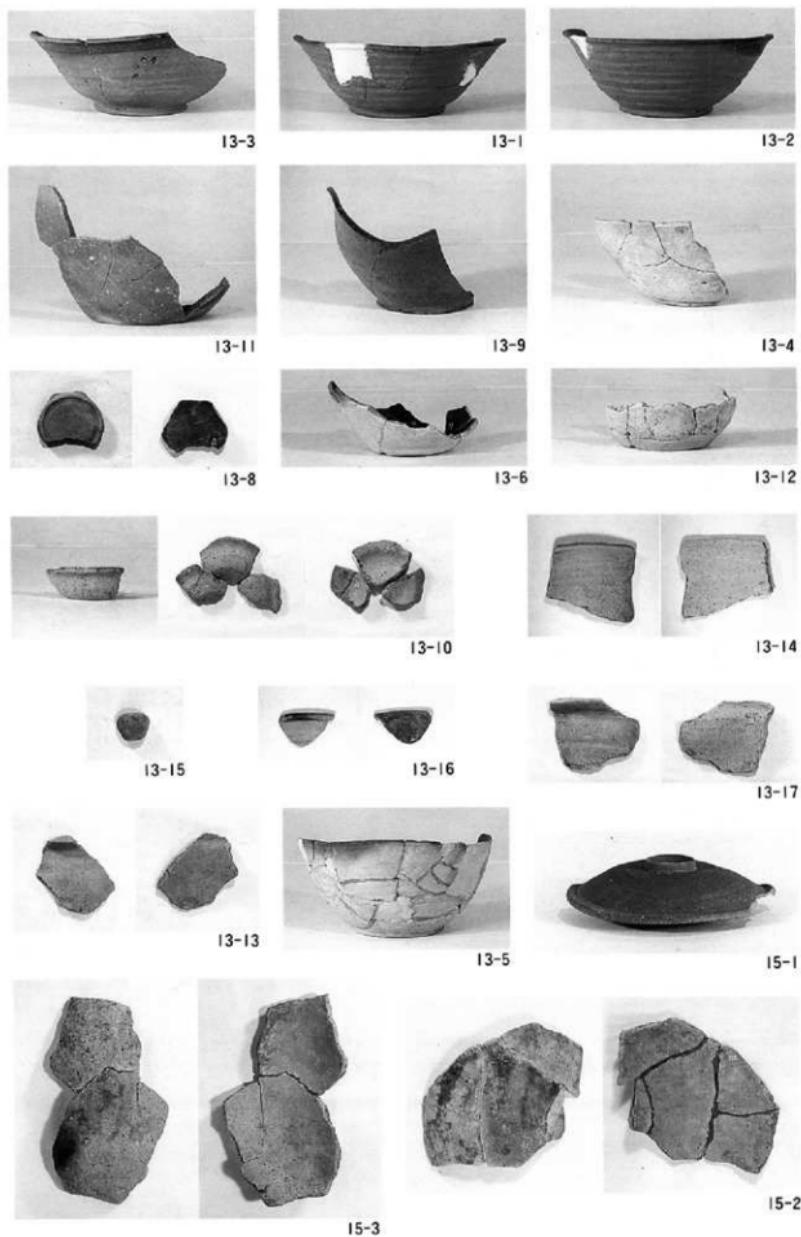


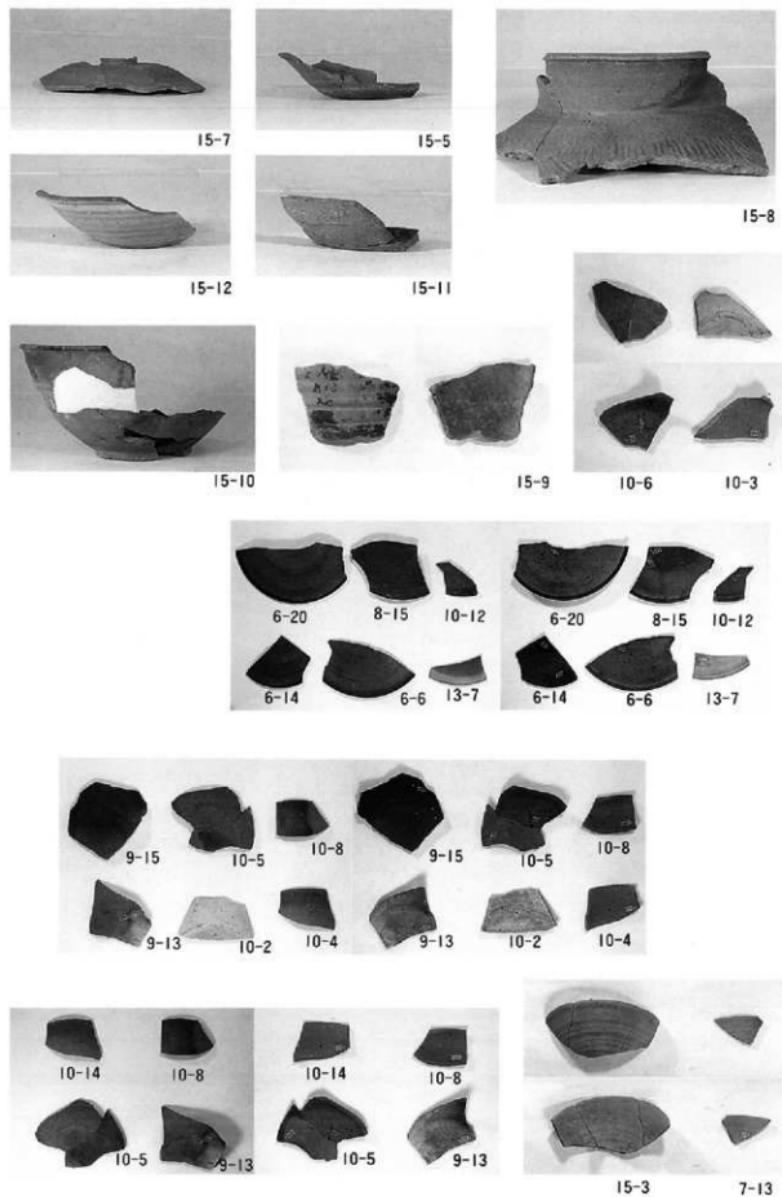


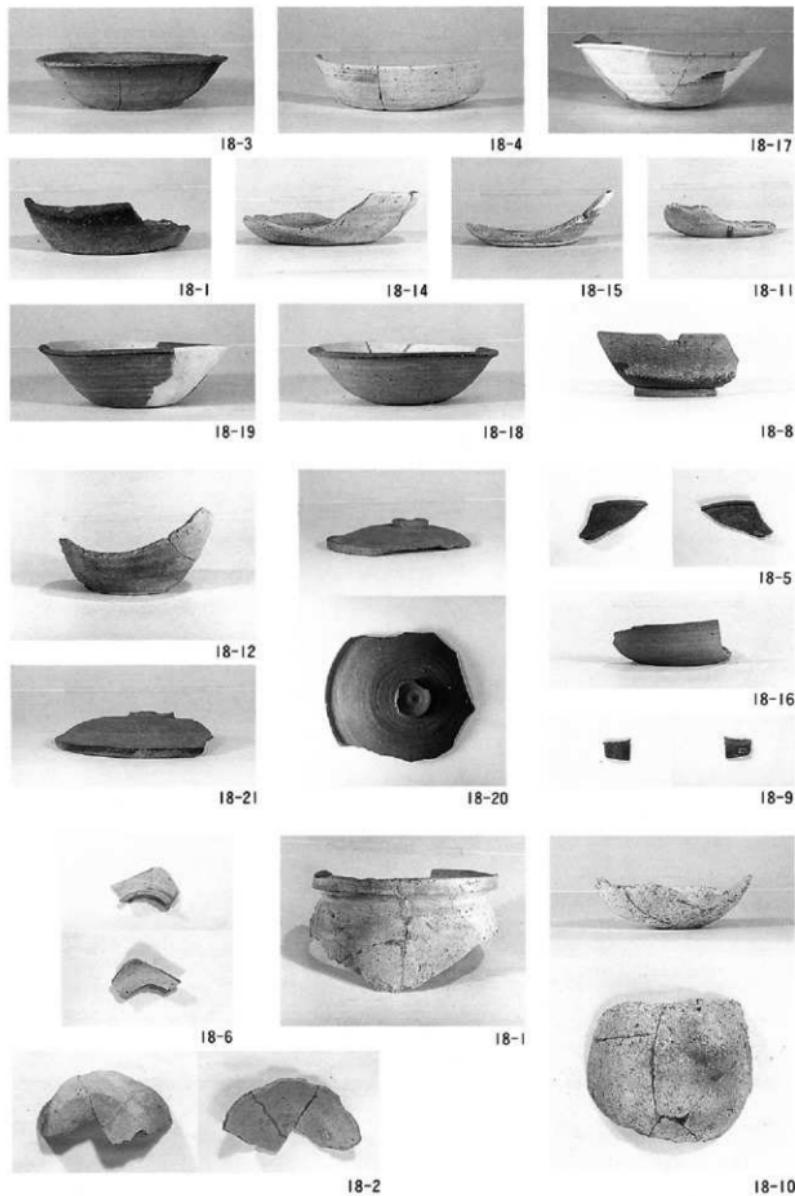


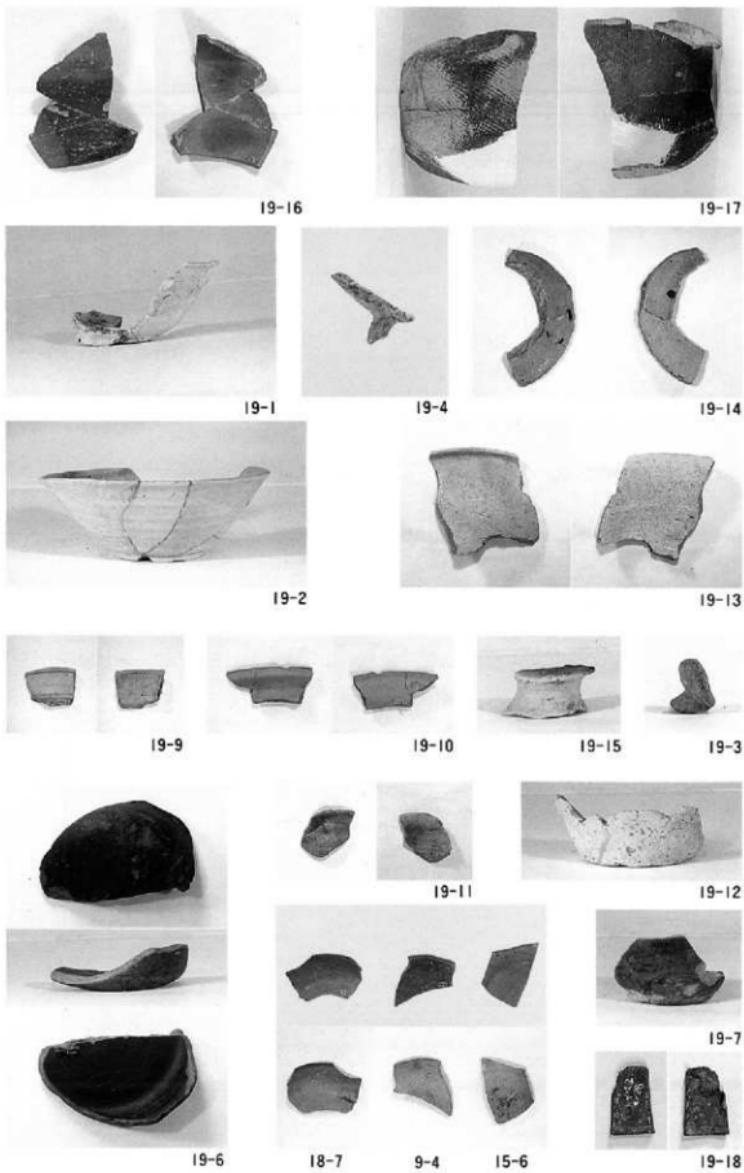












山形県埋蔵文化財センター調査報告書第41集

富山2遺跡発掘調査報告書

1996年9月30日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 0236-72-5301
印刷 藤庄印刷株式会社
